

ABAS社の
サービスエンジニア

衣玖矢曇

現場は戦場

トラブルの起きている現場は戦場だ。
普通それは比喩表現なのだけれど、ここは本当の戦場。
しかも、宇宙。

厚い窓の奥に戦場がある。
真っ暗な空間に時折小さな赤色や黄色の閃光が直線的に瞬く。
彼は武装輸送艦で今まさに戦場に向かおうとしている。
若い新人兵士ならば、震えでガタガタと脚が震えるのかもしれない。
ただ、彼は命の危険というより現場の兵士や整備士に怒鳴られ詰(なじ)られることの方が恐怖だった。
「まただ・・・」彼はコーヒーを啜りながら一人休憩室で呟く。
この前の出張費の精算さえ終わってない。
それなのに、また戦場だ。

備え付けのソファに腰掛け、電子ペーパーに写してきたトラブル内容が書かれたメールに目を通した。
斜め読みしたところ、SAL020Xの標準粒子加速砲の初弾が必ずジャムするというトラブルのようだ。
それがどうしたというんだ。彼はそう思った。
初弾が必ずジャムするのなら発艦した後、適当な方向に一発初弾を撃ってから戦場に行けば良いではないか。
そもそも粒子加速砲のトラブルならば、弾丸の供給メーカーであるバルキッシュ社の方にもトラブルコールをしろよと言いたくなる。
確かにうち（ABAS社）の兵器のリコール率は異常だが、決めつけは良くない。

ピポーン♪

休憩室のドアが開いた。
「やあ、いつもいつもすまんねえ。」
見慣れた初老の顔がそこにいた。
「いえ、こちらこそご迷惑をおかけして申し訳ありません。」彼は立ち上がり深々と頭を下げた。
「まあまあ、トラブルは勘弁だが、君が来てくれるのならば何度でも構わんよ。」
嫌味かと思ったがそれ以上思索を広げないようにした。
「どうです？現場は？」
「戦場は、それほど激しくないよ。いつかの時みたいなことは無いと思うよ。ハハ」最後に乾い

た笑いが出た。

「安心しました。」彼は本音を言った。

「でも、今回の対応期間は2週間だよ。戦場がいつ激しくなるともわからないよ。」初老の男は少しおどけてみせた。

「あんまり驚かせないでくださいよ。メグル艦長。」彼は白い歯を見せ笑ってみせた。

「ハハハハハッ。 さて、もうそろそろ、戦場だぞ。よろしく頼むよ。カーライル君」メグル艦長はそう言って出て行った。

カーライルは伸びをして、両手で自分の頬を叩いた。

「よしっ、やるか」

カーライルは、軍事兵器企業ABAS社のサービスエンジニア。

戦場で起きたABAS社製兵器のトラブル対応、不具合修復、修理することが仕事だ。

そこにそいつらはいた。

人類はよどみなく進化してきたし、これからも順調に英知を極めていくのだろう・・・。

そう、疑うことがなかった21世紀末期の人類。

しかし、それはある一つの事実によって揺るがされた。

--

鬱蒼としげる森林から広大な草原へ出た瞬間から人類の物語は始まったのかもしれない。

人は、火を手に入れ、それを使役することにより熱エネルギーを獲得した。

火の制御は人から恐怖と闇を退け、人に牙を向ける肉食動物はいなくなった。

恐怖と闇がなくなり、人の精神には余裕が生まれた。

余裕は遊びを産み、遊びは進歩を促した。

さらに人々は集まり、システム化し社会を生んだ。

社会は価値という概念を創り出した。

最初はモノが価値を持っていた。

しかし、次に情報が価値を持つようになった。

そして、最後に時間が価値を持つようになった。

また、社会はエネルギーの大規模集中を成し遂げ、より効率的なエネルギーのゲインを生んだ。

木から木炭へ木炭から石油へ石油から電力へ電力から原子力へと。

人の制御するエネルギーが膨大になり、ボタン一つで世界を滅ぼせるような時代も経験した。

--

おおよそ、地球上のありとあらゆる国と地域の経済発展を概ね終えた21世紀末期。

投資と発展を前提にした、人類の経済システムは飽和しきった世界に暗く重たい影を落とすようになってきた。

ついに、人類は次の投資と発展の場を暗く冷たい宇宙に求めるようになった。

手始めに第一候補として月が挙がった。

月に存在する鉱物資源や土地が投資対象となり、失速しかけた世界経済は再び回復の兆しをみせつつあった。

そんな中、第一次調査宇宙船が月へ出発した。

宇宙船は月面へ到着し、調査が始まった。

そこには、かつて大国が立てた旗が存在していた。

その時の調査員は、すこしホッとしたという。

そして、

月の裏の世界。

決して地球側から窺い知ることの出来ぬ、月の裏の世界へ。

調査員は当然裏にも不毛な月の砂漠が広がっていると思っていた。

しかし・・・。

いつもここから

カーライルは、自身の工具チェックをしていた。

最悪の状況の場合、荷電粒子や機体の破片がいつ飛んでくるともわからない宇宙空間での修理作業もありえるからだ。

また、自身の工具をスペースデブリとしないためにも、工具飛散防止通信システム”レッドクロー”が生きていることも確認せねばならない。

カーライルは、現場に行く前の工具の手入れをしている時が一番心地良いと感じる。

現場に行く前の高揚感と自らの手に馴染む愛用の工具をいじる安心感が絶妙な心理状態を作り出していた。

手だけ動かし、思考は今回のトラブルについて予測をいくつか立てていた。

「SAL020Xの標準粒子加速砲の初弾が必ずジャムる・・・。」カーライルはわざとらしく抑揚のない声で声に出してみた。

それ以降は普通に撃てるということだ。

つまり、初弾と次弾でなにか異なることがあるということ。

なんだろう？カーライルには思い当たることがない・・・。

というよりは、思い当たることがありすぎて、どれが原因なのか絞りきれなかった。

そもそもSAL020Xは、うち（ABAS社内）でも悪名高い020シリーズの初期投入型だし、しかもXがついている。

XはeXtremeという極地戦仕様もしくは、営業がハイハイと軍部の仕様を聞いて、その仕様をとりあえずそのまま再現したワンオフ機という意味だ。

おかげで、メンテナンスや修理の際は今までも酷い目に遭ってきた。

蔑称としてサービスエンジニア部内ではX（ペケ）と呼ばれている。

（まあ、焦っても仕方ないし、覚悟するだけだなといろいろと。）自分に言い聞かせて工具を片した。

窓の外が、真っ暗闇から白い壁面に変わった。

どうやら現場に着いたらしい。

カーライルは部材や大型工具の置いてある貨物ユニットへ移動し、工具や部材と一緒におりることにした。

白一色の美しい壁面に囲まれた貨物船港を降りて、この衛星基地が比較的新しいことに気付いた。

ここは、ムーンカウンター所属の自然衛星をくり貫いてつくった前線基地ブリトルボーンである。

ブリトルボーンとは、brittle-boneつまり骨がスカスカ、骨粗鬆（こつそしょう）という意味で至る所に穴ぼこがある自然衛星の外観にちなんで付けられたらしい。
つい、3時間前にメグル艦長から聞いたムダ知識だ。妻くらいにしかこのムダ知識を披露出来そうにない。

さぞ、中もボコボコのスカスカなのだろうと期待したのだが、綺麗な白い立方体の壁面があり、少し期待ハズレだなとカーライルは思った。

「おい！ どういうことだ！！」突然の怒号が貨物船港に響き渡った。
顔を真っ赤にした男がこちらに近づいてくる。

（ああ、いつものやり取りか・・・うんざりだな）
さすがに口には出さないが、顔には出てしまっているだろう。

サービスエンジニアには二つ直さないといけないものがあるという。

一つは故障やトラブった兵器、

そしてもうひとつは・・・。

月面調査員が月の裏を人の目を見た。

機械の目や電波観測ではない、人の目で。

調査員は月の丘から月の逆半球を見下ろし、一言、言い捨てた。

「Hey Artemis, you must be kidding!」

(月の女神よ、悪い冗談だろ・・・)

彼の宇宙服のメットには、煌々と輝く人工の巨大建築物、月面上を高速移動する人型の大型機械、どうみてもコロニーにしか見えない極長の構造体が反射し映された。

当然彼のメットには地球へリアルタイム配信されていたカメラが付いていた。

あまりにも堂々と、明らかに、そして美しい世界が月の裏側にあることが地球の世界へと知られた。

もはや、何かの見間違いやスタジオのセットで作ったものではないことは明らかだった。

月の裏の世界が1分間映しだされたところで地球への配信は、途切れた。

地球側が配信を切断したわけではなく、干渉電波による強制的な通信切断だった。

そして、彼を含めた第一次調査団は二度と地球へとは帰らなかった。

その直後、地球は大混乱に陥った。

ある者はおののき、ある者は狂乱した。

その後、地球と月との間で幾度と協議がされ、経済進出の要請が地球側からなされた。

月をそれを拒否、協議は決裂した。

さらに数ヶ月後、地球と月は全面戦争へ突入することとなる。

二つの修理

サービスエンジニアには二つ直さないといけないものがあるという。

一つは故障やトラブった兵器、

そしてもうひとつは・・・。

顔を真っ赤にした男がスィーっと直線的に向かってくる。

その直線の運動エネルギーを殺すこと無くカーライルへ体当たりをしてきて、胸ぐらを掴んだ。

「オイッ！ また、不良品売りつけやがったな」男の顔は更に赤みを増す。

「大体、お前の所のヤツはいつもこうだ、あの時だって、・・・・」愚痴の披露が始まった。

「落ち着いてください、ねっ。」カーライルは作り笑いを見せた。

「私、ABAS社のサービスエンジニア、カーライルと申します。よろしくお願いします。」

そう言って、カーライルは男に名刺を渡した。

「ふんっ、俺はムーンカウンター所属 ブリトルボーン整備班長のアプトだ。」アプトは言いたいことを言って少しすっきりしたらしく、落ち着きを見せ始めていた。

サービスエンジニアがトラブル先に行くと高確率で相手は怒っている。

その時、開口一番不満の披露が始まるが、その披露が全て終わるまでサービスエンジニアは口を挟んではいけない。

5分だろうが30分だろうが、不満や嫌味を聞かなくてならない。

そうしないと始まらない。

サービスエンジニアは装置を直す前に客の機嫌を治す必要がある。

「とりあえず、020X(まるで一まるえっくす)をみせてくださいよ。」カーライルは問題の解決こそ大事だと考える。

「クローゼットはこっちだ。ついてこい」アプトの眉間からシワは消えないが、最初ほどの激昂は無いようだ。

貨物船港から、020Xの置いてあるクローゼットへ向かう。

(機体のハンガーが置いてある格納施設をムーンカウンターではクローゼットと呼んでいる。)

連結通路内で、カーライルはアプト班長に尋ねた。

「アプト班長、あの、「アプトでいい！」あっ、ではアプトさん初段が必ずジャムるとのことですが、」

「初弾発射時の標準加速粒子砲、えーっと、ラビットファングの電離指数を教えていただけ

ます？」

「あの、コンソール画面の右下に出るゲージ値か？」アブトは答えた。

「そうです。四角で表示されるアレです。」カーライルは大事な情報が聞けるかもと期待した。

「正確には覚えていないが、確かゲージ値は2個か3個だった気がするな。」アブトが少し油で汚れた帽子を搔きながら答えた。

「2、3個、低いな。」カーライルは、そう言いながら新しい情報が聞けて嬉しかった。

このように、営業が客から狼狽しながら聞いてきた情報以外を手に入れるためにもまずは、客の機嫌を治さなければならない。

正確で新鮮な情報はトラブルを直す最高の工具だ。

そのためにも、客の機嫌を治し少しでも仲良くならなければ。

はじめての宇宙戦争

月の技術力は地球のそれより十数世代先を行っていた。

技術力で勝る、月の軍隊（ムーンカウンター）。

圧倒的な数で勝る地球の国連軍（ユニオン）。

ムーンカウンターとユニオンとの兵器全体のキルレシヨはだいたい500対1であった。

（キルレシヨ：撃墜対被撃墜比率のこと。上の例では、ムーンカウンター兵器は1機で500機のユニオン兵器を屠ることができる。逆にユニオン兵器は500機使って初めて1機のムーンカウンター兵器を屠ることができる。）

この第一次蒼銀戦争は、圧倒的に月側が不利な戦いであった。

月側にとって見れば、この戦争は防衛戦争であり、勝利したところで何の利益も生まない。

ましてや、ルナリアンにとって地球は住めないので侵略する意味もない。

（月の重力は地球のそれと比べて1/6のため、月生まれのルナリアンには地球は過酷な環境でしかない。心肺機能は地球人よりも脆弱で、骨密度は地球での生活に耐えうるものではない。）

そして何よりの問題は、月の技術流出であった。

圧倒的な生産能力を持つ地球に月の門外不出のテクノロジーが洩れでもしたら、この戦争は一気に終わる。

そのため、月の主力兵器には強力な素粒子分解自爆装置”ナノパーティクル”が付けられていた。もしもの時は、このナノパーティクルで素粒子レベルまで兵器を分解し技術の完全ブラックボックス化を図った。

ただ、問題はパイロットの生存率を可能な限り100%にすることであった。

技術流出を防ぐために人命を軽んじるわけにもいかない。

そのため、ムーンカウンターは、各軍事企業にパイロットの生存率を上げることを第一とした発注を行った。

各企業は、脱出装置の安全性を上げるなどの開発を進めたが、軍部の仕様を満たせるものはなかなかなかった。

仕様を満たせても、コストの折り合いが合わないなどの問題も出ていた。

開戦から半年、ジリジリと戦線は月側へ後退していた。

安全装置がうまく働かず、パイロットが戦死するたびに、月社会の軍事企業へのバッシングは強くなった。

戦線の後退と相まって、月社会内には閉塞感と困惑が広がっていった。

そんな中、圧倒的なパイロット生存率、99.99%以上を叩きだした幾つかの新興軍事企業が出てきた。

その一つがAnti Bee Armor Systems (ABAS)社であった。

クローゼット 二つ

クローゼットに着いた。

「開けるぞ、少し下がってる。」アブトはカーライルを少し下がらせた。

シューンッ

高さ10m以上もある厚い隔壁が静かに開いた。

「このブリトルボーンのクローゼットはここと奥の第二クローゼットの二つだ。」

少し自慢するかのようにアブトは説明を始めた。

「ただし、第二クローゼットへは入るなよ。殺されたくなければな。」アブトは語気を強める。

「えーっと、何故ですかって聞かない方がいいですかね。ハハッ」カーライルには心当たりがあったがあえて聞いてみる。

「ホワイトアウトの機体がある、らしい。」アブトは、溜息をつきながら答える。

やはりか、カーライルはそう思った。

「とにかく、急いで直してくれ。私は用事があってここにはいけない。また、後で来る。」アブトはそう言いながら時計に目を写した。

「はい、では早速。ハンガーユニットは使わせて頂いていいんですか？」カーライルは一応確認を取る。

「ああ、構わんぞ。後、ツールボックスはすぐにここに運び込まれてくるから安心しろ。」アブトは少し急いでいる。

「あっ、工具箱（ツールボックス）に強い衝撃は与えないでくださいね。」カーライルは注文をつける。

「そんなことはわかってるっ。最後に、他社の機体は扱うなよ！」アブトはもう、隔壁の方へ向かおうとしていた。

「わかってますよおー。」カーライルは大きな声で返事をした。

カーライルは現場が嫌いだが好きだ。

トラブルを早急に直さなければならないという意味では嫌いだ。

しかし、他社の機体をなんだかんだでじっくり見れるという意味では好きだ。

特にLipseec(ライブシーク)社の洗練されたデザインは個人的に好きだ。

ABAS社など足元に及ばない、巨大軍事企業Lipseec、転職したいとは思わないが参考にすべきデザインやコンセプトは機体の至るところにある。

さて、問題のSAL020Xの標準粒子加速砲ラビットファンクはどこだろう。

カーライルはハンガーを探す。

SAL020Xのハンガーにはなかった。

「あれっ、どこだ？」カーライルは周囲を探す。

「お、そこかよ。」カーライルは声を漏らす。

SAL020Xの足元に置いてあった。

おそらく、アプトが置いてくれたのだろう。ハンガーユニットにかかったままでは整備しにくいから。

どうやらあの男、口うるさいだけの客ではないらしい。

「ツールボックス 持って来ましたー。」後ろから大きな声が聞こえた。

若い整備兵がカーライルの工具箱を持ってきてくれたようだ。

「ありがとうございます。そこに置いてください。」カーライルも大きな声で返す。

「私は他の機体の整備でここにおりますから、何かあったら呼んでください。」若い整備兵は見えなくなった。

カーライルは工具箱から工具を取り出し、ラビットファングの分解を始めた。

まずは、リアクティブチャンバから開けますか。

カーライルは段取りを頭の中で決めていた。

硬い外殻を外し、リアクティブチャンバを開けた。

中を覗いてみる。

「はぁぁぁぁぁぁ？」思わず、客先にいることを忘れる。

セレンディピティ

ABAS社は最初から軍事企業だったわけではない。

月編歴（つきあみれき）9853年、新規に急造された第43農業プラントは大きな問題を抱えていた。

テラフォーミングに失敗、過剰な樹木の成長が起きた。

その結果、プラント内の生態系のバランスが崩れ、蜂の大量発生を引き起こした。

大気の整流管を通して、周辺の人々の住む総合プラントにまで、蜂が侵入。

多くの被害者が出ていた。

本来であれば、[蜂網](#)などの装備をして駆除にあたる。

だが、なにを思ったのか蜂を駆除するために甲冑のようなフルアーマーを販売しだした変な企業があった。

名をABAS（Anti Bee Armor Systems）社と言った。

しかし、これが月の民に受け、耐蜂用フルアーマーはバカ売れした。

そのフルアーマーは数十層の特殊レイヤーを重ねた積層アーマーとなっていた。

蜂の侵入は決して許さず、ウィルスの侵入すら許さなかった。

いったい、何と戦っているのかわからなかったがこの過剰なスペックが大いに月の民の心を掴んだ。

これを受けてABAS社は、小型の人型機体ランドアーマーレイヤーを販売した。

ランドアーマーレイヤーは座って操縦する人型のロボットであった。

もう半分蜂の駆除のことなど忘れていないのではないかという噂もあった。

それもそのはず、機体の機関部への蜂の侵入を感知すると操縦席ごと[ベイルアウト](#)させる機構が売りであった。

いったい、蜂相手に何故操縦席のベイルアウト機構がいるのだろうか。

そんなことお構いなく、ABAS社は次々に新型の人型機の発売を行った。

完全に需要を無視した意味不明の供給をやり続けた。

おおよそ、蜂の駆除が終わると、ABAS社は人型の農作業機へ商品の主力をシフトさせた。

その後、少しずつだが、ABAS社製の人型ロボットは宇宙空間のプラント整備用になど様々な環境へ進出していった。

農業用だろうとプラント整備用だろうと、必ずABASの販売するロボットにはベイルアウト機構が付いていた。

同業他社は、その謎の仕様に嘲笑を向けた。

ABAS社内からもベイルアウト機構に疑問を持つ声は頻出した。

しかし、創業者のラングストロンはどんなにコストが高くなるろうともベイルアウト機構を外すことは許さなかった。

人命を守ることを何より重要視していたらしい。

創業者のラングストロンが亡くなって数百年、ABAS社のロボットからベイルアウト機構がなくなること一度も無く、創業者の意思を確実に受け継いでいた。

そんな中、蒼銀戦争が勃発。

ABAS社はその抜群の安全機構を持って晴れて軍需産業の世界へ切り込みを行なっていくことになる。

今となっては、ABAS社のことをアーバス社と呼ぶ人が殆どであるがABAS好きのマニアは必ず、エービーエーエスと呼んでいる。

それは、Anti Bee Armor Systemsという社名の由来を知っているからである。

昔は蜂から人を守っていたが、時代が変わり今では冷たい宇宙で孤独に戦う兵士達を励起した加速粒子や物理兵器から守っている。

高い防御力を誇る数百層に及ぶ特殊装甲と安全なベイルアウト機構にはABAS社の数百年に及ぶノウハウが詰め込まれている。

リアクティブチャンバ

リアクティブチャンバを開けたカーライルは思わず叫んでしまった。
完全にチャンバ内が汚れている。
黒い何かわからないものがついている。
それが何なのかはもう開けてしまった以上、考えたくはなかった。
こんな状態では重粒子の電離など満足に行えるはずがない。

SAL020Xの標準装備、加速粒子砲通称ラビットファング。

砲身の根本にあるリアクティブチャンバと呼ばれる反応炉で重粒子を強電離させ、その時に生成された荷電粒子を強電界を掛け、射出方向へ打ち出す機構を持つ。

ムーンカウンターでは、基本的に弾丸による物理兵器は用いていない。

それは、宇宙空間において、スペースデブリとなる危険性があるからである。

ネジ一つで航行用旅客機を落とすことは容易い。

音速をはるかに超えたスピードでしかも減衰することなく宇宙空間を走り回っている。

数多の歴史を紡ぐ中でスペースデブリが数え切れない程の人命を奪ってきたことを月の民は知っている。

だからこそ、ムーンカウンターではスペースデブリの発生源とならない加速粒子兵器やLASER兵器をメイン武器としている。

「なんてことだ」正直カーライルは頭を抱える。

リアクティブチャンバの内壁にびっしり重粒子の分解生成物が付いている。

これでは電離指数が上がらないわけだ。

せっかく電離させてもチャンバ内が汚れているため、荷電粒子がすぐに失活する。

これじゃ炉内の圧力が上がらない、結果初弾がジャムるわけだ。

二弾目以降はチャンバ内が少しずつ綺麗になっていくため、問題なく撃てる。

これで、全て腑に落ちる。

どうしてこんな状態なのか、恐らくチャンバのクリーニングを定期的に行っていないことが原因か。

ふと周りを見渡し、あの若い工兵を探す。

後ろの方で何かをいじっている。

「すみませーん！ちょっといいですか？」カーライルは大きな声を出す。

「ハイッ！なんでしょう？」元気よく若い工兵が返事をする。

「アプト班長呼んでもらえます？」カーライルはお願いする。

「えっもう原因箇所わかったんですか？」工兵は驚く。

「ええ、もうほとんど。」カーライルは答える。

「恐らくアプト班長は一時間は捕まりませんね。機密情報ですので詳細はお話できませんが。」
工兵は笑顔で答える。

「そ、そうですか。」作ったような笑顔にすこし違和感とザワザワとした感覚を覚えた。

「困ったな、実はですね。・・・」カーライルは宇宙空間でラビットファングのクリーニングを行いたいことを伝えた。

「わかりました、そういうことだったのですね。こちらのメンテナンス不足だったとは申し訳ありません。」若い工兵は申し訳なさそうに返答する。

「私が発進許可をもらってきます。その間に準備をお願いします。」

「ありがとうございます。ではよろしくお願いします。」カーライルは仕事が早く終わりそうで安心した。

「あははははは、ハッハハヒヒヒヒヒ。」

下品な笑い声が四畳半の居間に響いた。

天井は高くなく、貧乏学生が恥じる事無くその生活を満喫しているような部屋であった。

中央には古びた炬燵、その上には汚く食べ散らかされた蜜柑。

コタツムリ体系でアクセサリーがびっしりと付いたどちらが本体かわからぬ携帯を持ち少女は話込んでいた。

「ええー、いいよお〜。ウチがそういうの嫌いって知ってるやん。」

手をバタバタさせる、その手の下には脱ぎ散らかされしわくちゃになったセーラー服があった。

ふと少女の後ろの障子が開く。

「もう！またこんなに散らかして！！誰がいつも片してるとおもってるんです！」長身の女性が入ってきて開口一番怒り始めた。

「ええ、ロップちゃんがいつも片付けてるよお〜。」屈託のない笑顔を見せつつ少女は答えた、なお携帯を離す気は無い模様。

「えっ、ああ、おねえちゃんが入ってきたの。アハハハハ」

「もう携帯電話はおやめください。」女性は呆れつつ話す。

「誰と話しているんですか？姫様。」女性は尋ねた。

「だれとも話してないよお、一人携帯電話ごっこお。」少女はさらに屈託のない笑顔を見せびらかす。

「……………」女性は三白眼になりつつ少女を見つめる。

「うっそぴょーん、本当は、第七艦隊提督、アミューゼさんとだよお。」

『アミューズ です！！』携帯越しに男性の声が聞こえた。

「で、アミューズさんと何の話を？」女性は長く伸び垂れた耳を触りながら聞いた。

「えっ聞いちゃう？聞いちゃう？もふもふのロップちゃん♪」少女との意思疎通は難しい。ロップが睨みつける。

「もう怒らないでよお、あのね、えんこうの話、次はいくらでしようかっていう。」少女の顔が真面目になる。

『ちがうでしょおおおおお』携帯から聞こえる声が明らかに焦っている。

「ぎゃはははははははは、ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒイ」何がおかしいのか少女は笑い転げる。

「まあいいや。」ピッ 少女はいきなり携帯電話を切った。

切るなんて一言もアミューズには伝えてないはずだが、ロップは思った。自由過ぎる。

「ロップ何かしたの？朝御飯？晩御飯？塾の時間??」少女は笑う、笑う。

「ツッコみませんからね私」ロップはきっと睨みつける。

「えースパイの話でしょお。フフン」少女は優しく微笑む。

「え、ご存知だったんですか？」ロップは少し驚く。

「うんにゃ、知らなかったけど、ロップちゃんの顔に書いてあったから。」

「えっえっ、え？」ロップはさらに驚く。

少女は起き上がり、ロップの前に立つ。

「ほらほらしゃがんで、」少女は急かす。

ロップはしゃがみ、やわらかな垂れたふわふわの耳が畳に付くか付かないかの距離になった。

少女はロップの顔を抱きしめた。

ロップの鼻には、少女の甘い目眩がしそうな程の苺の匂いが広がった。

「ちょっ、」ロップが声にならない声をあげる。

「やっぱりあなたって最高だわ、フフウ、可愛い。」少女はロップの耳を撫でる。

その小さな華奢な腕は、ロップの硬くも女性らしい柔らかさを失わない肩へまわされる。

「姫様、おやめくださ、」ロップはもがく。

もがくも抵抗する気などさらさら無かった。

ロップの耳を持ち上げて、少女は甘く囁く。

温かい吐息がロップの耳を撫でる。

「ブリトルボーンに紛れ込んだスパイのことでしょう。大丈夫よ。すでにホワイトアウターに事に当たらせてるから。うまくやるよ。」語りかけが終わると同時に少女の緋色の瞳は閉じられた。

少女は腕を戻し、ロップの顎を上げた。

ロップも瞳を閉じている。

少女の小さな唇がロップの下唇にあたる。

甘美な接触が少女とロップの間で行われた。

少女はそのまま自らのものを彼女の口の中へ侵入させた。

頭の中がふわりとして温かいもので包まれていく。

全身がゾワリと反応する、体の状態が変わる。

ゆっくりと密着面積を広げつつ少女は彼女を押し倒していく。

「あっ はぁ、おやめください。緋無月神久夜(ひなつきのおうかぐや)様。」彼女からも甘い吐息が漏れる。

「やめな—い。最後までして、 あげる。 」神久夜は答えた。

ロップには拒否権は無い。

月皇の勅命なのだから。

ユーコピー？ アイコピー！

カーライルはSAL020Xへと乗り込んだ。

既に、機体の反応炉には火が入っている。

高駆動タービンの高い音がフレームを通してわずかだがコクピットへ伝わる。

この高いキンキンした音がカーライルは好きだ。

機体を動かす為、権限の入力を行う。

ABAS社のサービスエンジニアのみに与えられた特別な権限アドミニストレータ05を入力した。

「いちいち生体情報のログなんて取ってられんしな。」カーライルはため息混じりに呟く。

機体の下に置かれたラビットファンクとメンテナンス用弾倉サックをSAL020Xの無骨な大きな手で掴んだ。

「ラビットファンクと弾倉は積んだ、システムもオールグリーン。」カーライルは指差し確認を行った。

「こちら、ABAS社サービスエンジニアのカーライル、発進許可願います。」管制室に連絡する。

『了解、ブリトルボーンの宙域から離れ過ぎないようにお願いします。射出管へ歩いてください。

ユーコピー？』若い女性のようだ。

「ア、アイコピー」カーライルは声がすこし上ずる。

SAL020Xを射出管へと移動させる。

射出管は既に開いている。中へ入る前にラビットファンクに弾倉を装着させる。

暗い射出管へ入る。ここから暗く冷たい世界へと行くのだと思うと正直怖い。

宇宙へ出たことなど、数え切れない程あるカーライルだがやはり怖い。

『射出管への搬入を確認、射出のシーケンス権をSAL020X-01に譲渡。ガイドビーコンが出た後にお好きなタイミングでどうぞ。ユーコピー？』管制室の女性が少し笑っているようにも聞こえた。

暗い筒の四方から青白いガイドビーコンが淵（えん）の宇宙へと美しく伸びる。

宇宙へ出ることは怖い、でもこのガイドビーコンをいつも見るたびにほんの少しだけ恐怖が薄らぐ気がした。

カーライルは、はっきりと答える。

「アイコピー！ SAL020X-01発進。」

瞬間、体が浮く。

直ぐ様、宇宙空間の方へ一気に重力がかかる。

筒の中に重力カ場が形成され、SAL020Xが打ち出された。

「ふ～、なんとか出たな。さて行きますか。」カーライルは機体を進める。
機体の背面に集約されたスラスターベーンを吹かし、ブリトルボーンから離れる。

レーダーを見る。味方機は周辺には居ない。ユニオン機も当然居ない。
索敵範囲を変える。レンジを最外にしてかなり遠方にムーンカウンターの機体がいることがわかった。

レンジのセッティングをヴァリュアブルに変えた。

索敵だけはきちんとしておかないと、[フレンドリーファイア](#)など笑えない。

クローゼットにもデカデカと連続無事故無違反452日とパネルが貼ってあった。

その連続記録をABASのサービスエンジニアが破ろうものなら、本店から殺されてもおかしくない。

気をつけなければ。

機体は壊れれば直せばいい。

しかし、人間は違う。

簡単に治せるわけではない。

代替品があるわけではない。

だからこそ、最高の安全を。

ABAS社のエントランスにはこの社訓が掲げられている。

カーライルがABAS社に居続けるのもこの理由によるところが大きい。

まあ、もう少し給料が良かったら申し分無いのだがといつも思う。

神久夜がその存在を自ら認識した時、そこには何も無かった。
そこは不毛な地、砂と砂利と岩と氷くらいしか無かった。
暗く冷たく生き物と呼べるものはいなかった。
超高真空の世界、降り注ぐ放射線、光は見上げればチラホラとあった。
とりあえず、歩くことにした。
何年歩いたのだろうか？数百年は経っていたかもしれない。
手足は傷だらけになったし、体はボロボロだった。
それでも、飽きることなく歩き続けた。
ある時、大きなクレーターを歩き稜線へ超えた。
その時初めて決して止めなかった足を止めた。



そこには、蒼い球が浮かんでいた。
歩み続けて色んな色の球を見てきたが、こんなに秀麗なものは見たことがなかった。
そして、頬を何かがなぞった。
涙であった。止むことが無く流れ続けた。

神久夜は今でもその時の蒼を忘れない。
夜明け近くまでロップと二人で飲むとき、最後は必ずこの話になる。
何万回と聞いたはずなのにロップは黙っていつも聞いてくれる。

その蒼い球を見つめて、数十年が経った時あそこに行く方法はないか考え始めた。
そこから、ありとあらゆるものが月に生み出された。
神久夜一人の手によって。
そして、とうとう蒼い球へ行く方法を見つけ出した。

神久夜の眼前に眩い光が現れた。

神久夜はその光に向かって歩き続けた。

決して止めること無く、光に向かって歩き続けた。

蒼の世界へ行くことだけを思い。

その胸には希望が詰まっていた。

そして、これが希望という概念だということもそのときに学んだ。

光に包まれ、前も後ろも右も左も上も下もなくなったとき、神久夜は生まれて初めて眠りに付いた。

シャー、サラサラー サワサワッ

笹の葉が擦れ合い、薄い音を奏でた。

一面笹の葉の枯葉で覆われていた。

笹の葉の合間から太陽の光が漏れる。

木漏れ日の指す、そこに 神久夜 がいた。

ゆっくりと瞼を開ける。



! ?

ブリトルボーンからはかなり離れた。

レーダーを確認する。

ブリトルボーンと020Xの距離はだいたい20kmのようだ。

よし、作業をはじめるか。

忘れずに確認しておく。

「警告にオートリアクション、セット済み。索敵範囲ヴァリユアブル。」

指差し確認終了。

SAL020Xのコクピットは非常に簡素である。

ゆったりとした背もたれのラグがある単座型である。

肘掛けの部分に手の形にくぼんだ操縦コンソールがある。

五本の指の部分にクリックやドラッグできるスイッチングデバイスがあるがそれは補助的なものである。

人の持つ手足を使って巨大な人型兵器を運用することは不可能である。

仮に可能であったとしてもスイッチングデバイスの数は膨大になり、また入力されるまでのタイムラグがあり過ぎて実用に耐えうるものではない。

そこで考えられたものが、精神感応型の情報入力デバイス“MIIES”ミースである。

ミースを使うことにより人からの無限ビット長の情報を機械に送ることが可能になった。

しかも、限りなく遅延無く情報の入出力が行えるようになった。

ミースの登場以来月社会ではスイッチングデバイスが姿を消した。

ブリトルボーンを背にSAL020Xがラビットファングを構える。

カーライルの意識は020X自身と同質化している。

メンテナンス用の弾倉サンクは既に付いている。

「これよりラビットファングのリアクティブチャンバ洗浄をはじめる。」音声記録のために声に出す。

「2～3発で済めばいいが、どうだろう。」カーライルは、少し不安になる。

右人差し指でクリックする。

フォオオオオオオオン！！

高い唸りが機体からする。

数秒後、ラビットファングから光の筋が飛び出す。

カーライルは020Xの光学センサーを通してその軌跡を見た。

加速粒子は宇宙空間では減速することは殆どない。

太陽風の影響も微々たるものだ。

加速粒子の色を見て後数発と言ったところかとカーライルは思った。

このトラブルの案件を聞いたときどうなるかと思ったが、なんとかなりそうな気がする。

仕事が終わってないにもかかわらず、少しホッとした。

左下に美しい地球が見える。

自分たちは決して住むことが出来ぬ、生命の惑星。

月社会の中には、地球に憧れを持つ者も多い。

確かに地球の映像を見ると心とか体とかよりももっとも根の部分で知っているという気がする。

しかし、カーライル自身は行きたいと思ったことは無い。

映像を見るだけで十分だった。

そんなことよりもはやく妻の手料理が食べたい。正直そう思った。

一頻りの物思いは、突然警告音と共に中断させられた。

ビィィィィィィィィィィィィ！！！！

ヘルメットも兼ねたヘッドマウントディスプレイに警告ポップアップがでる。

「なんだ！！」突然の事態に慌てる。

O20Xに高速で近づく物体がある。

索敵レンジを対象物に合わせる。

機体照会が済んで、その詳細が表示される。

▶ Lipseec社製 人型兵器 LLAS-909 MkIII

「クローゼットに置かれていた機体か・・・」カーライルは思い出す。

とりあえず、管制に連絡を取ることにした。

「こちらSAL020X-01 カーライルです。こちらに急速に近づく機体があります。詳細をお願いします。オーバー。」

管制に連絡を取りつつも、ライブシークの909からは意識を離さないでいた。

機体の識別色は白、つまり味方機。

「ピッ こちら管制、ABAS社のカーライル、落ち着いてよく聞いてください。当該機を撃滅せよ。決して逃がすな。詳細は後です。ユーコピー？」

「えっ えっ 」カーライルは混乱した。

「どうということですか、」言っている意味が分からないし分かりたくなかった。
気が動転してきた。心拍数があがる。

「決して逃がすな。 撃滅せよ。 ユーコピー？」同じ声と内容が聞こえると同時に焦りがあると語気からわかる。
質問に答えろよと怒りが沸く。

そう感じた瞬間、ディスプレイに表示されたライブシークの909の識別色が白から赤に変わった。
赤は一級の敵機の色だ。
戦場で出会えば、最優先で消すべき存在。

「・・・・・・・・っ」声にならない。

ファーストコンタクト

うえっほ　ぐはああ　くはっ

咳き込む。

目が痛い。

鼻がむずむずする。

耳がキーンとする。

しばらくうずくまった後、スックと神久夜は立ち上がった。

無理もない、初めて使うんだ。こんなもんだろ。そう決めた。

鬱蒼と生い茂る竹やぶの中、細身の麗しい少女は裸でそこにいた。

「ここがあの蒼の世界。」

そして竹やぶの合間から見える、白い球。

「あそこが私がいたところ。」神久夜は理解した。

ガサッ

後ろの方から音が聞こえた。

「ほりゃ、どうしたと、嬢ちゃん？」後ろに何者かがいた。

見た目、自分と似た形をしている、高さは向こうの方が高いが、神久夜はそう思った。

「そげんな格好して、何処の子ね？」何かを聞かれているらしいことがわかる。

「もしかして、喋れんとね。」その者は膝を曲げ神久夜と同じ目線となった。

先ほどとは表情が変わったことがわかる。

なんて変化に飛んだ生き物なのだと思ふと神久夜は素直に感心した。

その生き物は自らの体から何かを一枚脱ぎ、神久夜の肩にかけた。

肩から暖かさが伝わる。

「おかあーちゃんここに連れてくしかねーが、こんなところでいても危ないやろおて。」何かぶつ
くさ言っている。

「ほおらついといで。」そう言って神久夜の手を握る。

「ほおわ、なんでこんな冷たいと！！風邪でも引いとんか？」今度は神久夜の額に手を当てて
きた。

この生き物なにがしたいか全然わからない。

「ほおわ、なんでこんな冷たいと！！風邪じゃないんか？」また表情が変わる。

そう思った瞬間、体がフワッと浮き、その生き物の背中におぶさられていた。

体を通して熱が伝わる。

(あたたかい・・・)

神久夜は素直にそう思った。

そうするとまた瞼が重くなった。

竹やぶの中で見つけた少女を、キミハネはおぶって急いで家に帰る。

体の冷たくなった少女を背中におぶってキミハネはとんでもないことが起きる気がしていた。

なんというか、自分の決まりきった日常とはおさらばできる。そんな気さえした。

そして、それ以上にこの子とはとにかくとてつもないものだという確信にさえ似た直感が心を支配しつつあった。

この子を連れ帰って自分の子に出来れば、妻も喜ぶ。

妻のことは本当に心から愛している、それでも天の神さんのいう通りか何か知らないが子どもだけは出来なかった。

そのせいで、妻には本当に苦しい思いをさせたと思う。

村の者からキツく当たられたこともあった。

とにかく、はやく帰らなければ。この子にも元気になってもらおう。

おかあちゃんの美味しい料理を食べればすぐによくなるは・・・

「えっ」キミハネは、少女をおぶったまま、地面に倒れこんでしまった。

何か足に違和感があった。

「はっ！」急いで少女を探す。いない。と思ったが自分の胸の中だった。

「良かった。」キミハネは安心した。

「よくねえ～んだよなあ！！ああああん！？」怒号が聞こえる。

声の方を向く。

大男が目の前にいた。臭い。

手には刀がある。

初めて理解する、襲われているのだと。

「はわわわっわわわ、お金ならないとよ」頑張ってるが伝わっているかどうかは知らない。

「その子を置いてけ、へへッ」そうやって舌なめずりをする。

ゲスが、と心の中でキミハネは思った。

隣の芝生は青いか？

Lipseec社製 人型兵器 LLAS-909 MkIII

伝統あるライブシーク社の売れ筋商品人型兵器LLASシリーズのしかも最新型、909MkIIIを相手にするなど。

嫌だ、死にたくない。

しかし、ここで戦闘データのログを持ち帰ることが出来れば、部内での年間最優秀賞を貰える可能性も高い。

カーライルは、悩んでいた。

死の恐怖とあのライブシーク社の最新型と戦えること、天秤は揺れ動きその決断を下せずにいる。

心拍数が上がる。

どうして上がるのか心当たりがあり過ぎて内省する気にすらならなかった。

ヘッドマウントディスプレイに別の警告ポップアップが出た。

『心拍数が上がりすぎです。』

余計なお世話だ。

カーライルは思った。

なんだかんだ思案にふけているうちに、909のシグナルは近づいていた。

「やるしかないっ」カーライルは決断した。

909の相手をするしかない。

「管制、こちらSAL020X、カーライル、これより当該機909MkIIIを停止させる。」カーライルは再び管制に連絡した。

ピッ

「こちら管制、停止させる必要はない。コクピットを狙い、撃滅せよ。ユーコピー？」抑揚のない声がヘッドセットフォンから聞こえる。

「ア、アイコピー！」カーライルは、命令の不可解さに躊躇したが、そもそも020Xで909MkIIIを停止させるなど出来るわけないと一般的に考えることが普通なため、管制からの命令に答えた。

しかし、そう口では応答したが、撃滅させるつもりなどさらさらなかった。

停止させることが無理と思われているのならば、やってみせる。

そんな変なところに拘る悪い癖がこんな場面でも発揮されることになった。

出来ないと言われるとやってみたくなる。こんな自分の性格を妻はいつも呆れ顔で変人と揶揄する。

カーライルの頭の中は、他社の最新型をうちのX(ペケ)機で停止させたという自慢話を妻に話すことでいっぱいになっていた。

909MkIIIが数十kmまで近づいてきた。

ビィィィィィィィィィィィィ！！

警告音が鳴る。

「なんだ？」その瞬間、機体全体に衝撃が走る。

「うわああああああああ」MIIESを通して損害情報がダイレクトにわかる。

左肩部に加速粒子が被弾した？

左肩部のLA(レイヤードアーマー)がかなり剥がれたらしい。

第二層領域上部まで剥がされたか。

ライプシーク社の射撃性能はそこまで優秀なのか。

高速接近しながら、あの距離で当ててくるのか。

当てられたにもかかわらず、他社の性能の良さにカーライルは感動すら覚えた。

020Xのオプティカルセンサーではなにも視認できなかった。

何も視えないが、909MkIIIが近づいてくるであろう方向にありっただけのメンテナンス用弾丸サンクを打ち続けた。

打ち続けた無の広がる宇宙空間に瞬間的に、何かが瞬く。

バリュバリュリリリリリイ

雷鳴が宇宙空間を飛んだ。

020Xの下方を太く歪な軌道を描く加速粒子が這った。

909MkIIIの射撃は正確だ。

だからこそ、020Xを中心にばら撒いた弾丸サンクの洗浄用粒子に909MkIIIの加速粒子はいとも簡単に減衰されあらぬ方向に曲げられる。

「あとは怖がらずに接近戦あるのみ！！」カーライルは、自らを奮い立たせた。

020Xの背面のスラスターベーンを全開にした。

レーダーに気を配る。

やはり、909MkIIIも高速で近づいている。

「あちらさんも接近戦をする気だな。」

909MkIIIを視認できた。

オープンチャンネルで交信を試みる。

どうやら回線を閉じているらしい。

というより、こんなことを起こすくらいだ。

ネットワークシステムもフルクローズで完全にスタンドアロン状態らしい。

020Xの左袖に右手を持ってくる。

半透明の短剣を抜く。

FVB(フォトンヴァイブロブレード)をけりをつける。

美しい909MkIIIの造形がオプティカルセンサーを通してカーライルの瞳にも映る。

「くう、やっぱりかっこいい。」つい、口に出してしまう。

909MkIIIの操縦者は焦っているのか。

[CIWS](#)(クローズインウェポンズシステム)で迎撃してきた。

今更、CIWSなどでこのABAS自慢の積層アーマーを抜けると思っているのか？

「うちもなめられたものだな！！これで終わりだ。」カーライルは完全に勝った気でいた。

スラスターベーンの向きを急激に変え、909MkIIIの背中にあるジェネレーターにFVBを突き刺さそうとした。

FVBの入射角度は申し分ない。

スラスターベーンをフルで吹かせた。

「おらあああ。」普段、言わないような恥ずかしいセリフをそれらしく言うてみる。

ゴンッ！！

鈍い音が機体全体から操縦席に伝わった。

「えっ・・・」FVBはジェネレーターに届いていない。

そのことは分かった。

スラスターを吹かすが、進まない。

何故だ。

何で。

黒い枝のようなものが3本、いや4本909MkIIIから生えていた。

しかもその枝がしっかりと020Xの機体を固定している。

まさか、隠し腕・・・。

すべて、これを狙われていた。

だから、CIWSでそれっぽく挑発されたのか。

909MkIIIの反応に対して都合の良い解釈をしたばかりに。

「選択的思考は失敗する・・・。」思考が漏れる。

「やばいやばいやばい。！！！！！！」

カーライルは一気に気が動転する。

体が震える。

死ぬ！！

ヘッドマウントディスプレイには力無く、警告が羅列されていた。

人それを理(ことわり)という

「へへ、ふう、その娘をよこしな。」臭い大男が歪な声を発した。
その手には錆びついた鉈が握られていた。

「あっ この娘は具合が悪いんよ。すぐに養生させないかんとよ。」
キミハネは絞るように声を出した。

「ああ！！んなこたあ知らね一よ。遊女屋にでも売りゃあ、いい金になる。へへっその前に味見してやってもいいがな。」

「そっそれは出来んとよ。」キミハネは少女を強く抱きしめ逃げ出そうとした。

うまく脚がまわらない。

土を踏みしめられない。

ガクガクと震える。

でも、この娘は助けなければ。

絶対にそうしなければいけない気がする。

使命感というよりはそうすることが当たり前のことのように思えた。

「ふん、めんどくせえ」

ザクッ

「ぐああああ、」キミハネの右太ももにするどい痛みが走る。

「おらあ、そこだけ！」

体を蹴られる。苦痛に顔が歪む。

神久夜は理解しつつあった。

自らの状態と今後予想される展開を。

仮説を立てて、論拠を挙げ、現状から類推される反証を出す。

さらに新しい仮説を立てるというループ思考を何万回と行った。

たった数十秒の間に。

「大丈夫だから。」

「へっ？」透き通った硝子が震えるようなそんな声が耳に入った。

ぐんっと後ろに引っ張られる。

瞬間、少女を離してしまう。

キミハネと少女の間に大男が立つ。

「はあはあ、来い！！」

大男の腕が神久夜に伸びる。

「それは出来ない。」

再び透き通った声が聞こえ、すぐにそれはあの少女の声だったのだとキミハネは再確認した。

「ああん？いいから来い！」

大男の腕が神久夜の細い白い腕を捕まえようとした。

「うっ うぐはあ はあはあはあはあは、」突然大男が苦しみだした。

とうとう立っていられなくなり、その場にうずくまってしまった。

体が動いていない。

もしかしたら死んでしまっているのかもしれないが、近づきたくなかった。

キミハネは、血が出た右太ももを抑えつつ、少女の元へ這いながら近づいた。

「なんかしたと？」

キミハネは少女を抱き寄せつつ疑問を口にした。

「何も、ただ、こういう結果になる仕組みが施されていた。」

神久夜は抑揚の無い声で言った。

キミハネはさっぱり要領を得なかった。

やっぱりこの娘、頭かどっか強く打っているのではないか。

目の前の男が固まっている。

正確に返答したつもりだが、ダメだったか。

「お天道様が見てたんだよ、運命だったんよ。」

神久夜は口角を上げつつ、濁した表現をした。

「やっぱりか～悪いことは出来んと、ほんと。」

キミハネは違和感を覚えたが目の前の少女を救えたことにホッとした。

「ほんじゃ、母ちゃんのところ行くか。うまい飯食わしてくれるき。」

キミハネは笑い、立ち上がろうとした。

するどい、記憶にある痛みが走った。

自分が切られて立てなくなっていたことを再確認した。

神久夜は苦痛に顔が歪んだ男が立てない理由を理解した。

「ははあ、どうっすかなあ」

神久夜はそっと手をその傷口に乗せた。

そして、そっと手を離した。

「！！ えっ 何をしたと？」

キミハネは、すこしゾツとした。

あのぱっくりと割れ、肉の中身が見えていたあの傷がきれいさっぱりなくなっていた。

「どれがいい？えへへ。」

神久夜は笑いながら続けた。

「なかったことにした、先送りした、移した、加速させた、交換した、見えなくした、感じさせなくした」

キミハネは選択の羅列に目眩がした。

「ま、まあ、歩けるならいいとよ。」

キミハネは、溜息をつきつつ、すっと立ち上がった。

「そうそう、結果が一緒ならどれも同じ。」神久夜も笑いながら立ち上がった。

「嬢ちゃん、なにもんね？どっから来たと？」

キミハネは、少女の手を引きつつ家路へ急いだ。

「私は月、 月から来た。 月の皇って言えばわかりやすいかな♪」

キミハネは固まった。

思考、体動ともに。

ナノパーティクル

ビーッ ビーッ ビーッ

ヘッドマウントディスプレイには、警告メッセージポップアップが映し出される。

やばい、やばい、どうにかしなくては。

カーライルは自分を落ち着かせようと必死だった。

はぁ はぁ 肩で息をする。

肺いっぱい酸素を取り込む。

両腕にじんわりと違和感がある。

新しいポップアップが出る、『興奮抑制剤を投入しました。』

心臓にキュッと痛みが走る。

カーライルの020Xを909MkIIIをいまだにしっかりと捉えている。

バーニアをどの方向に噴かしても離れない。

燃焼剤を無駄にするわけにもいかない。

020Xを捉えた隠し腕が動き出す。

「何をするつもりだ」

腕をまわし、020Xの腹部に909MkIIIの頭を近づけた。

ビィィィィィィィィィィィィ！！！！

今までとは比較にならない、けたたましい音が鳴る。

「今度は何??」カーライルは今以上に悪くなるのか想像できなかった。

『敵機に高エネルギー反応あり、高電磁場を検出。』可愛らしい声が聞こえた。

「えっ、ていうかこいつ(020X)喋れたのか。」

SAL020の標準仕様には、音声報告機能などないはず。

まさか、これが軍部(ムーンカウンター)の特別仕様なのか。

いやいや、そんなこと悠長に考えている状況か今は。

自分にツッコミを入れる。

まさか、この近距離で加速粒子砲を撃つつもりなのか。

この距離、エネルギーピークを見るに、うちの積層アーマーでも耐えられない。

909MkIIIの頭部が割れ、大型の加速粒子砲が現れた。

瞬く間に、美しいシルエットを誇ったが909MkIIIが腕が6本ある異形の魔物のような形になった。

これが、ライブシーク社のあの909MkIIIなのか。

天使からまるで悪魔だ。

そういえば、地球の寒い地方の海には、クリオネと呼ばれる生き物がいると聞いたことがある。

普段は優雅に泳いでいるが、捕食する瞬間に頭がパッキリと割れ触手が伸びるらしい。

まるでクリオネだな。

カーライルは、為す術がなく半分諦めそうになっていた。

大きな音で鳴り響いていた、警告音が突然消えた。

「えっ どうした？」カーライルは周囲を見る。

先ほど聞いた、可愛らしい声がまた聞こえてきた。

『素粒子分解装置、ナノパーティクルを使用しますか？』

なるほど、最悪の状況の場合こうなるのか。

っていうか、あきらめてんじゃねえええええ！！

カーライルは自分のことを棚に上げて、コクピット内で叫んだ。

そうだ、絶対何かあるだろ他にも。

武装はもうフォトンヴァイブロブレードだけだ。

909MkIIIのジェネレーターにも隠し腕にも届かない。

020Xの腕や脚をFVBで斬るか。

否、隠し腕4本は020Xの四肢を捉えている。

駄目だ。

他には他には。早くしないと、加速粒子を撃たれてしまう。

そうだ、FVBの極超振動を隠し腕に伝えられれば。

ヴァイブロブレードは、刃を高速振動させ対象を割断する武器である。

この武装について、ABAS社は後発組であるため、まだまだノウハウが溜まっていないところが多い。

特にヴァイブロブレードのコア技術は、刃の高速振動を機体自身にいかにか伝えないかである。

高速振動をうまくキャンセル出来なければ、刃の威力事態が落ちる上に、振動が伝わった腕の内部の機械的締結部を緩める事態も起こしかねない。

ABAS社は、高速振動をキャンセルする機構(FVBフェイズキャンセラー)が脆弱で現在ブラッシュアップ中の部分でもある。

カーライルの最後の望みは決まった。

「アドミニストレータ05の権限で武装FVBのリミッターを解除。」

『解除しました。』

「FVBの出力設定ウィンドウを表示。」

「FVB出力値をメーカーの保証範囲外まで最大値に設定。」

『メーカーの保証範囲外の使用になりますが、よろしいですか？』

「そんなこと言われる場合か、続行。』

『了解。』

「エネルギー供給設定ウィンドウを表示。」

「アームズシステムのバイパスラインを開放、推進システムのバイパスラインを閉鎖。」

『エネルギー分配ラインを変更』

「メイン、サブ全てのジェネレーター出力値を最大に設定。」

『ジェネレーター出力値を変更。』

「FVB オン！！」

ファー————ン！！

機体のタービンとは違う高音が聞こえてきた。

020Xの視覚センサーを通して、FVBを持った右腕が震えていることが視認できた。

右腕を捉えている隠し腕にも振動が伝わる。

「あと少し、撃たれるのが先か、隠し腕が折れるのが先か」

バキン！！

機体全体にもものすごい音が響いた。

「やったか！？」

カーライルは愕然とした。

隠し腕ではなく、020Xの右肘が折れていた。

おいおい、嘘だろ。

「最初の想定とは違うが、これで少し動けるはz . . .」

瞬間、視覚センサーに眩い光が満ちた。

バリユバリバリバリバリエイイイイイイ

空間を引きちぎるような放電音が聞こえる。

遅かったか。

909MkIIIの加速粒子の波に020Xはさらされてしまう。

次々と積層アーマーが剥ぎ取られていく。

ヘッドマウントディスプレイには警告ポップアップで埋め尽くされる。

既に中層まで積層アーマーを剥がされる。

これまでか。

カーライルはナノパーティクルを起動させることにした。

「ナノパーティクル 起動認証パス 《月が綺麗で・・・

動かなくなるまで殴る殴る殴る

「かえったよおおお」キミハネは扉を開けるなり大きな声をだした。

神久夜は少しびっくりして、繋いだ手を思わず強く握った。

それを察したのか、キミハネは優しく語りかけた。

「心配せんでもよかよ。母ちゃんはやさしいからよお。」

「はあーいい」

家の暗がりの方から、明瞭な声が返って来た。

暗がりから濡れた手を拭きながら優しそうな女性が出てきた。

「おかえりなさ・・・」

女性は、自分の旦那が幼い女の子を連れて帰っていること、そしてその子の服が血で真っ赤なことに状況を理解出来ずにいた。

そして、すぐにピンときた。

「おう、キヌサ、この子は・・・」とキミハネが言いかけたその時。

キヌサはキミハネに飛びかかった。

胸ぐらを捕み、後方にふっ飛んだ。

神久夜は、焦った。

恐らく今家から出てきたのが、この男の嫁なのだろう。

最初、優しそうだった顔が激昂した鬼のような顔になった。

「あんたあ！！ 私が子ども出来ないからって！！」そこら中に響き渡るであろう金切り声だった。

「代替りの嫁を連れてきたってのかい？えええ！？ しかも、しかも・・・あんな小さい子を傷つけて！！恥を知れ！！ このクソ野郎！！！！ うええええええええええええええええん」

大声で泣き叫び、馬乗りになって、キミハネの顔を殴り続けた。

「ちっ 違っ ぶふあっ ぐはあ キヌサ、は、話を・・・ 聞いて・・・」キミハネを手足をバタバタさせ、必死にしゃべり続けた。 視界は真っ暗になり始めていた。

「ちょ、 やめ、 きいっ・・・」抵抗していた手足がとうとう動かなくなった。

な、何なんだこの女やばい。

これが数千年後問題となるDVなのか。

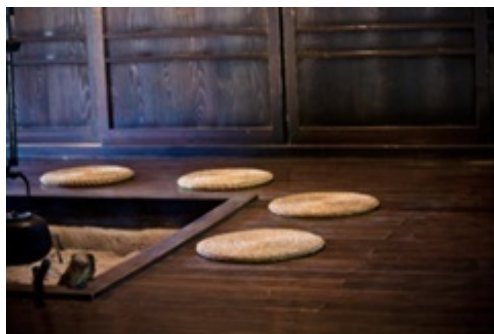
神久夜は凄惨な状況に脳がハングアップしそうだった。

キヌサは動かなくなった旦那から離れ、ゆらりと立ち上がった。

両手は鮮血で真っ赤になっていた。
すくすくと神久夜の方に近づいてきた。

やばい、やばい、やばい。
動けない、事態を飲み込めずに体を動かさない。
さっき大男に襲われたときとは違う、不条理なまでの異常性。
「あ、あ・・・」異常な恐怖に声まで出なくなっていた。
キヌサは神久夜の前に立った。
すると急にしゃがみ、神久夜を抱きしめた。
「ごめんね、ごめんね、あんなクソ野郎のせいで、・・・うえーん」

どうやら、殺されはしないらしい。神久夜安心した。
抱きしめられたキヌサの肩越しに動かなくなったキミハネを見た。
目を凝らすと人差し指が動いている。
生きてる！良かった。



囲炉裏の火は暖かで、三人の団欒の時間を演出した。
ぱちぱちと炭が燃える。
白化した灰が落ち、中に煌々と熾た火が垣間見える。

「あははは、ほんとうごめんて、あんだ。」
「いや、笑い事じゃないんやき！！ 花畑と死んだ爺ちゃんが手を振ってたし。」
キミハネは忘れていた、そう、嫁はとんでもなく思い込みが激しいんだった。
そういう意味では、かぐやとの初対面はもう少し考えるべきだった。
「どう、おいしい？かぐやちゃん？」キヌサは笑顔を向けた。
「うん、とってもおいしい！！」本当に美味しかった。
「いや～ん、可愛い！！ もう、うちの娘に決定！！」キヌサは神久夜に抱きつき撫で回した。
最近、不安定だったキヌサに笑顔が戻り、キミハネも嬉しかった。

月の皇であろうと、なんだろうと自分の娘だ。
そう思うキミハネだった。

物語は、はじまった。

909MkIIIの大型加速粒子砲によって、020Xの積層アーマーは次々と剥がされつつあった。こんな状態では、ベイルアウトするとかえって危険だ。

ベイルアウト機構がNo Availableという表示になっている理由はそういうことなのだろう。しかし、だからといって自爆を勧めるのはいかなものか。

カーライルは自社製品に疑問を抱きつつも、ナノパーティクルの認証パスを言うことにした。

「ナノパーティクル 起動認証パス 《月が綺麗で・・・

ビィィィィィィィィィィィィィィ！！

また、一段と大きい警告音が鳴った。

次は何だ。

はあ、ため息をつく。

『コードインターラプト！ 電子戦を受けています。ファイヤーウォールを突破されました。スタンドアロン状態への移行をおすす・・・ガ ピピ・・・』

「おい、どうした？」

『月が綺麗ですね？ あはははは、 ひねってるようで単刀直入な辞世の句だな。』

020Xの無機質な応答が人間ぽい返答になっていた。

「な、なんだ、こいつ突然フランクになりすぎだろ・・・」

『ああ、ごめんごめん、あんたんこの兵器の管理権限、私が貰ったから。』

『あんた、ABAS社のサービスエンジニアでしょ？ あんたんこの兵器、電子戦兵装さうとう弱いよ、こりゃクレームもんだよ。 ホントは、MMA規格ギリギリじゃない？』

カーライルは状況を理解出来ずにいた。

「おい、人様の管理権限奪っておいて、クレームとはどういうことだ！」

カーライルは自分でも何を言っているかわからなくなっていた。

『ああ、助けてもらっという何？その言い草。』ヒステリスティックな返事がかえってきた。

『落ち着いて、良く状況を理解しなさいよ、おっさん。』

・・・コクピット内には相変わらず警告音が鳴っているが明らかにその数は減っている。落ち着いて、020Xの視覚センサーと意識をあわせる。

目の前の909MkIIIは完全に沈黙している。

よく見ると、909MkIIIに薄いピンク色に発光する帯がいくつも刺さり、ひらひらと泳いでいる。

『909MkIIIなんて、電子戦を仕掛けられると感知すると、外部通信システムの電源を落としはじめたのよ。あんたんとこ（ABAS社）よりは、電子戦の恐ろしさを知っているよね。』

ひらひらと泳ぐ帯は、020Xの後ろ側から伸びていた。

『無線じゃ、ハックできないから、仕方なくタイトネープを伸ばして、有線でジャックするしかなかったのよねー、さすがライブシーク社といったところかな。』

光る帯が伸びている方向に020Xの視線を写す。

『おおっと、 何見ようとしてるかわかってるの？』

一旦視線を写す動作を止める。

『あえて言うけど、これは”ホワイトアウター”による処理だからね。』

やっぱりか、カーライルは感が外れていなかったことに落胆した。

ホワイトアウター、ABAS社内では”修正液”と呼んでいる。

月の皇直属の私設武装部隊。

諜報活動の左翼大隊(レフトウィング)と実働処理の右翼大隊(ライトウィング)がいる。

月の軍事技術は地球のその十数世代先を行っている。

しかし、ホワイトアウターはさらにその二十世代先を行っていると呼ばれる。

噂では、ホワイトアウターの武力だけで、月と地球を無に返すことができるとできないとか。

その目的は、月皇のすべてを取り返すためと言われているが真偽及び真意は不明。

そして、ABAS社内では、ホワイトアウターに会ってしまったら死ぬ気と逃げろ社内通達が出ている。

それは、ホワイトアウターは公には絶対の秘密であり、その姿を見てしまった者は必ず殺されるからである。

ホワイトアウターの存在理由、それは史実の改竄と月皇の意に沿わぬ者の塗りつぶしにほかならない。

ホワイトアウターの手にかかれば、0は1になるし、1は0になる。

『もう一度言うね。これはあんたの会社で言うところの修正液による塗りつぶしなわけ、わかるでしょ、今すぐ、視覚センサーをブラックアウトさせなさい。そうすれば、愛する奥様の元には帰れる。』

くそ、なんでもお見通しかよ。

噂には聞いていたが、これほどとは。

「わかった。ところで、909MkIIIの搭乗者はどうするんだ？殺すのか。」

そう言ってカーライルは視覚センサーをブラックアウトさせた。

『殺す？ ああ、最終的にはね、でも、殺されるまでの間、死んだ方がマシと思えるようなことが散々続くはず。』

カーライルは黙った聞きながら視覚センサーシステムを再起動させた。

「なんで、909MkIIIの奴はこんなこと起こしたのか？ユニオンに寝返ったのか？」

カーライルは、まともな返答が返ってくるとは思えない投げかけをした。

そして、意識は020Xの背面センサーに合わせた。

『んなこたあ、知らないよ。・・・おっさん。はあ。』

カーライルは背面センサーに意識を合わせ、後ろを見た。

ホワイトアウターの機体を見れる！はずだったが、視覚センサーにはブロックノイズが載り肝心な機体の部分が映らなかった。

『おっさん、あんた死にたいの？フフフ、でも、これだからエンジニアって奴はおもしれー。』

駄目か、視覚ジャックされている。どういう原理でこんなことが出来るのかは分からないが見ることはできなかった。

『面白いことを教えてやるよ、ムーンカウターの奴らは私らホワイトアウターに遭遇すれば、100%逃げるのさ。』

あいつらは、月皇のためとか、愛する月の家族のためとかたいそうな名文を掲げて、戦争に参加してるが、いざとなると自分の命が可愛いのだ。

他者のためにと口では言うが、本音は自分が一番だし、本当は戦いたくもないし、安全に暮らしたいだけなのだ。』

「それは、皮肉なことだと言いたいのか。」カーライルは少し語気を強めた。

『別にそうは言ってない。それは自然なことだと思うしあるべき人間の姿だとも思う。』

問題はお前たちさ。軍事企業の開発研究部のエンジニアとか戦場で直にデータを集めしたり、リペアをするサービスエンジニアのことさ。

お前たちエンジニアというのは、私達のご丁寧に逃げろって言っても聞きゃーしない。

見るなというとお前のように手を変え品を変え何が何でも見ようとする。

天邪鬼かよ。まったくヒヒヒ。しかもその動機がいかにも陳腐だ。

家族のためとか、会社のためとか、そんなんじゃない。

純粹に知りたいから。お前たちエンジニアは決まってそう言う。

もっと良いものを作りたい、参考にしたいし、それを超えたい。

死んでしまった元も子もないのに、そんな簡単な思考さえ出来ない。』

「・・・それじゃ、私も殺されるということか」

『・・・別に殺しはしねーよ、お前ら、私らをどんだけ極悪非道な部隊と思ってるんだ。』

私らのトップもお前たちエンジニアと同じさ、知りたいから、良いものを作りたい、カッコいいもの大好き。

だからお前らを見ると月皇を見ているようでね。そんなことは出来ないよ。

さあ、帰りな！』

ガコン！！

020Xに大きな衝撃が走った。

どうやら突き飛ばされたらしい。

『燃焼剤残っているからブリトルボーンに戻れるでしょ。 後、ホワイトアウターに遭遇したっという記憶は塗りつぶし、いいね?』

その声を聞いた後、020Xのシステムが一部復旧した。

視覚センサーが正常に戻ったころには、眼前にブリトルボーンが迫りつつあった。

カーライルは、戦闘データを参照したが、909MkIIIとのデータはすべてなくなっていた。

「あーやっぱりだめか。 はあ〜。」

ロストテクノロジー (紛失物的な意味で)

神久夜は、キミハネとキヌサとしばらく幸せに暮らした。

神久夜は直に人間と暮らすことによって、“人”というものを理解したし、それを愛した。

人の持つ可能性、そして恐るべき汎用性の高さを知った。

神久夜は後年、月に戻ったとき人という生き物について書物にまとめた。

神久夜が最も驚嘆したことは以下である。

~~~~~

人は、自身を素体とし様々なオプション(拡張機能)を持つことでとんでもないポテンシャルを発揮することができる。

人は未熟児同然で生まれ出る。それは、人の持つ巨大な脳と呼ばれる機関が生まれる際の産道の大きさと合致しないためだ。

そのため、生物としては未完成同然の状態、生まれるのだ。

では、何のためにそれだけの大きな脳が必要なのか、それは、多種多様な拡張機能に柔軟に対応し制御するためだ。

人は、道具を操り、外界を変える。

人は、言葉を喋り、世界を規定する。

人は、情報を操り、感覚を共有する。

人は、機械を動かし、時間を短縮化する。

人は、物質を分解し、構造体を再構築する。

人は、機能を創発させ、心を生み出す。

この蒼の世界には、人以外にもたくさん生き物がいる。

しかし、人間ほど、ひ弱で、脆弱で、弱小で、か弱く

頑丈で、強靱で、強大で、逞しい生き物は他にはいなかった。

そして、人は永遠に完成しない。

決して補完することはない、だからこそ、成長し続ける。

それがこの蒼の世界の万物の霊長者たる証だ。

しかし、この生き物は・・・。

~~~~~

キミハネとキヌサは長らく子どもを授からなかったこともあり、たいそう神久夜を可愛がった。

二人のありったけの愛情を注いだ。

そして、三人は、やがて家族になった。

彼らの住んでいた村の中でも神久夜は噂になった。

長らく子どもが出来なかった二人に子どもが出来たと。

しかもそれが、とんでもない美しい娘だと。

神久夜は三時間でキミハネとキヌサと家族となり、
神久夜は三日間で村の人気者となり、
神久夜は三十日で国中に知れ渡った。
神久夜は、三年間で七つの宝を創り出した。

一つ目は、機械設計技術(Hardware)の結晶、仏の御石の鉢と呼ばれるもの。
二つ目は、制御設計技術(Control)の要素、蓬萊の玉の枝と呼ばれるもの。
三つ目は、情報工学(Quantum)の概念、火鼠の皮衣と呼ばれるもの。
四つ目は、電気設計技術(Electrically)の集合、龍の首の珠と呼ばれるもの。
五つ目は、化学材料設計(Materials)の順列、燕の産んだ子安貝と呼ばれるもの。
六つ目は、心(Emergence)の規約、写し身の経典と呼ばれるもの。
七つ目は、**(* ** * ** * **)の**、* ** * ** * ** と呼ばれるもの。

遠い未来に日の出ずる国と呼ばれる神久夜のいた国は、この七つの宝のちからで繁栄の極みに至った。

その国には、飢えもなく、不平不満もなく、圧政や暴動もなく、死ぬ者さえいなくなっていた。その国の人々は、すべてを手に入れることが出来て、すべてを見通すことが出来て、すべてを平等に分かち合うことが出来るようになっていた。

その国は、完成してしまった。

それは、神久夜が蒼の世界にたどり着いてから三十年後のことだった。

国が完成してしまったということは、その構成要素たる国民つまり人が完成したことに他ならなかった。

決して完成するはずのない生き物が完成してしまった。

その大いなる矛盾を解消する事象がある日、突然起きた。

それは混乱や惨事という言葉では形容出来ぬほどの混沌があふれた。

全てが狂った。

無限大の代償と代価と対価を支払わされることになった。

当然、矛盾を抱えた者、つまり人が支払うはめになった。

神久夜は人ではないため、無傷で無関係で無償だった。

当然、こういう結末になることはわかっていた。

人が持つ価値基準、良い悪いのそれが神久夜には理解出来なかった。

だから、神久夜にこの結果の是非を問うこと事態、論理を欠いたことであつた。

人とは真に勝手なもので、神久夜を攻撃することで全てを解決しようとした。

そんなことをしても何一つ解決しないことは明白だったにもかかわらず。

神久夜の育った村に人の邪悪が迫りつつあつた。

神久夜は村の住人と父と母と飼っていたうさぎたちと蒼の世界から銀の世界へ逃げた。
しばらくして、繁栄を極めたその国はある日突然消失した。
やがて、地球に西暦が始まった、かつてそのような国があったことを知る"人"はいない。

さて、神久夜は銀の世界に戻り、銀の世界を蒼の世界にすべく心血を注いだ。
人の数も順調に増えて来た頃、七つの宝のちからを使おうと神久夜は思った。
霊知の技術の集合体、七つの宝。

これは人に破滅をもたらす。

しかし、神久夜にはそれを回避する方法もわかりつつあった。

だから、技術革新速度を早めるためにも、段階的に宝のちからを使うことにした。

「え〜っと、確か袖の下に入れといたはず。」神久夜は、かなり久しぶりに袖の下をごそごとと探し始めた。

．．．

「ん、んん??、 あれ? おっかし〜なあ。．．．。 ．．．．．．．．」

「えっ、 嘘、マジで!?!!!!!!?」

「宝が無い！！」

カツ井はない

カーライルは020Xをブリトルポーン搬入口に着基させた。

020Xクローゼットまでハンガーユニットを使ってなんとか動かせる状態だった。

クローゼットに着き、コックピットから降りる。

下でアプト班長が待っていた。

「とりあえず、お疲れさん。」アプトはカーライルを一瞥してため息混じりに吐露した。

「よくもまあ、ここまで壊して戻って来れたな。お前の操縦センスが凄いのか、ABAS社製の積層アーマーのおかげか・・・。」

「私も、色々言いたいことがあります、とりあえずパイロットスーツを脱いでとりあえず一杯したいんですけど。」カーライルは精一杯の虚勢を張った。

ギリギリの命のやり取りを冷たい宇宙空間でやったのだ。

カーライルの体はどっしりと疲労感が占めていた。

「残念だが、一杯はもう少し先だ。先にMP(軍警察)の取り調べを受けてもらう。」

「っ・・・！、おい、私はアウトサイダーを未然に防いだんだ。現に、ホワイトアウ・・・ウグッ・・・ガ・・・」言いかけて口を抑えられる。

「迂闊なことをいうもんじゃない。」アプトの目はジッとカーライルを見ていた。

(また、これだ。アンタッチャブルが多すぎる。)

月の世界は、ホワイトアウターを始めに触れられぬ事実が多々ある。

その中の一つにアウトサイダーがある。

アウトサイダーとは、月の技術を持ち、地球に逃げる者を言う。

はあ～

溜息をして首をガクリと落とした。

両腕をMPに抱えられる。

「さあ、来い。」右側の大きいMPが低い声でそう言った。

朝来た時には通らなかった、別の通路にカーライルは連れて行かれた。

ほの暗い、通路を通る。

カーライルは、ぼんやりとあの壊れた020Xの修理費誰が出すんだろ。

まさか、うち（ABAS社）？

うちが悪い訳じゃないしな・・・。

そんなことありえないよな。

でも、軍と良好な関係を続けたい上のお偉いさん方は、ただでもう一機進呈するかもしれない。

そんなことを考えているうちに、小さな扉の前に着いた。

「さあ、入れ！」MPに半ば押し込まれるように扉に入った。

はあ？あの2人のMPが尋問なり、取り調べするんじゃないのか？

扉に入ると、歩いてきた廊下よりほの暗いと感じた。

そして、目の前にまた、扉があった。

「はい、カーライルさん～♪ お部屋にお進みください。」

扉越しに声が届く。

ゾツとする。

カーライルは一步前に踏み出す。

「あ～パイロットスーツはそこで脱いでね。」

そういえば、まだ脱いで無かった。

そそくさと脱ぐ。

意外とパイロットスーツは脱ぐときに手間取る。

MIIESとのインターフェイスは首元にある。

これを外すときが結構痛い。

「っ、・・・んあ。」少し呻く。

「何やってんだ、さっさと外せよ、おっさん。」

やはり、この声・・・。

パイロットスーツを脱ぎ、次の部屋に入る。

そこには、パイプ椅子に座った長身の女性が脚を組み腕を組んでいた。

「よお、おっさん、15分ぶり。」この喋り方。

「見たかったんだろ、ホワイトアウト部隊の人間を。」

「礼を言う。」カーライルはボソリと呟いた。

「あ？ ヒヒヒヒ」綺麗な顔立ちに似合わない下品な笑いが小さな部屋の中に反響する。

「だから、助けてもらった礼を言う。ありがとう。」カーライルは正面の女性をみて大声で言った。

「良いつて、良いつて。そんなことぐらい。」

「というわけで、取り調べだ。ヒヒヒ。」

女性の長い髪の中から、白いフワフワのものが立ち上がってピンッと立った。

「・・・え、ええええええええええ」カーライルは口が塞がらなかった。

フワフワの長い棒は、ピンッと立ち、ピコピコと動いた。

それは紛れもないうさぎの耳だった。

「私は、月皇の右翼大隊。ホワイトアウトのひとり、アンゴラだ。ちなみにお前たちのような

人間という生き物ではない。ちなみにちなみに、アンゴラちゃんって言ってくれるとすごくうれしかったりするよん♪」

とんでもない事実を言われた気がしたが、最後のぶりっ子アピールにイラッとカーライルはした。

「あーお前、イラッとしたりろおー！！」アンゴラは立ち上がって抗議した。

後回しにする性格

七宝がない。

やばい。

追い込まれると語彙もなくなる。
あれらは、人に栄華と破滅を招く。
だからこそ、私の管理下にあらねば。

神久夜は焦った。
何処に置いた。
何処に忘れた。
誰が持ってる。

確かなのは、私の袖の下にはないことだ。
もし、七宝が青の世界に残されているのならば、なんとしても取り戻さなければならない。

それから暫く経って神久夜は、自らの生体情報を使って別身を作り出した。
それは当初、月の民からエイリアスと呼ばれた。
エイリアスたちは神久夜の代わりとなり、月の世界の平定を務めた。

やがて、月は青の世界とは異なる独自の文化、世界を構築した。
月の民の中に、エイリアスたちが神久夜の別身であることを知る者も少なくなり
神久夜の存在すら忘れ去られるくらい銀の世界は時間を重ねた。

やがて、エイリアスはその名を変え、月兎と呼ばれるようになる。
歳も取らず、人より優れた演算能力と身体能力を持つ月兎はやがて月の社会から排斥されること
になる。

暗くほんのりと甘い香りの中、とうとう月兎は月社会の表舞台から姿を消すことになる。
とうとう月の民はそのルーツ（出自）さえ、無責任に忘れた。

銀の世界に総合プラントが乱立するようになり、その人口が数億を超えた頃。

— 銀縫いの都 —

そこは、銀縫いの都と呼ばれる銀の世界の首都が置かれているプラント。

太陽からの僅かな光を反射した時、そのプラントは美しく銀色に鈍く光る。
それが、あたかも銀色の糸の刺繍のように見えるためそう呼ばれる。
そこには、銀の世界の統合政府や各巨大企業、月世界の根幹がすべて集まる。
銀縫いの都の緑の区画。
鬱蒼と植物が生い茂る。

そこには、静かな喫茶店や小さな図書館などがそれぞれの距離感を保ちつつ建っていた。
その閑静さは、それぞれの空気のようなものを共有していき独自の空気を作り出していた。
そんな中、一件のアロマショップがあった。
壁面にはツタが生い茂り、ある者を拒みある者を招く、そんな雰囲気があった。
日にやってくるのは、授業をサボった女子大生やアロマ好きの奥様くらいであった。

その店の奥の奥、そこに小さな部屋がある。
日がな一日、ネットと睡眠を楽しむ女性がいた。

名を神久夜と言った。
正式名は、緋無月神久夜(ひなつきのおうかぐや)。
銀の世界の始まりの一手。
美しき銀の世界を裏から操るといふか見守る放任主義者。

木蓮のさっぱりとしたアロマの香りが漂う中、神久夜はポツリと言った。

「そろそろ探さなきゃなあ～。七宝。」

月編歴8513年の発言である。

「残念だか、カツ丼はない。」アンゴラはカーライルに向かってそう言った。

？

カーライルにはなんでカツ丼が話題にあがるのかわからない。

カーライルのモヤモヤした顔を見て、アンゴラは溜息混じりに呟いた。

「あ～、ほら、取り調べにはつきもんだろ、カツ丼はさ。」

「・・・そうなのか」カーライルは力無く返す。

「あー！！ もうネタの解説をさせるなよ。」

そう言いつつ、月の人間は地球の文化を知らないということをアンゴラは気付いた。

「ホワイトアウターが取り調べするときにはカツ丼が出ることがあるのか・・・？」カーライルはとりあえず会話を続ける。

「アハハハハ、フヒヒヒヒ、そうきたか～。」アンゴラはその返しに笑いを誘われる。

「まあ、座れよ。おっさん」アンゴラは口角の上がった顔で着席を進めた。

スッとパイプ椅子を引き、カーライルは座る。ギシッと独特の軋みの音がでる。

「私が聞きたいのは1つだけ。020Xに乗るとき、整備工と会話しただろう。」

「ああ。それが、・・・」

「話を遮るな。最期まで聞け。こんな部屋まで連れて来られて、取り調べするのはホワイトアウターの月兎、恐怖を感じるのはわかる。でも大事な話なんだ。この世界を守るための。」アンゴラの緋色の目はジッとカーライルを外さなかった。

「すまない。」カーライルの表情が変わる。

「話を戻す。909MkIIIを持ちだしてお前と交戦したのはそいつだ。お前と会話した若い整備工だ。」

・・・。言葉にならなかった。

カーライルは動揺した。

そんな素振りには全くなかった。表情は硬いと感じたが、そんな性格なのだろうと自分では思っていた。

しかし、気付いたとしても止められたのだろうか。

でも、何故・・・。

「はいはい、ストップストップ。考え過ぎだおっさん。」アンゴラが口を開きカーライルの思考を遮った。

カーライルはびっくりする。

「ほんと、人間ってのは表情豊かだ。」

「別に思考なんて読んでないから安心しろ。私に振った話に対して表情が変われば何を考えているかぐらいわかるよ。」アンゴラは丁寧に説明する。

「そこなんだよ。私が気になっているのは。整備工なのに、わざわざ機体を盗む必要がある

のか。」

つまり、アウトサイダーではない。カーライルの思考が結論を急ぐ。

「整備工であれば、月の技術を流出させるなど簡単。」カーライルは呟く。

「そうだ、普通機体を盗むなど、かなりリスクな行為だ。地球人もバカじゃない。」アンゴラが思考を一步進める。

「整備工ならなおさらそんな行動に出る必要がない。」

「目的は、月の技術流出じゃない・・・。」カーライルはハツとする。

「そうさ、私の思考にやっと追いついたか。」アンゴラは嬉しそうな顔をする。

「目的はホワイトアウター・・・」衝撃を受ける。

「ンフ、そう今回の一件を起こしたのが誰なのかは知らない。でもそいつはホワイトアウターの技術を狙っている。」

「技術革新の到達点、セブンスコアを。」カーライルは目的語の詳細を口に出す。

しかし、すかさず口に出してしまったことを後悔する。

今、とんでもないワードを出してしまった。ホワイトアウター相手に。

「後悔先に立たずって奴だな。おっさん、ンフフフ」アンゴラは、この上ない笑顔になる。

なるほど、軍事企業たちは我々の”それ”をそう呼んでいるのか。アンゴラはこの会話に意味はあったと確信した。

「おっさんがいい子と教えてくれたお礼だ。私からも予想を説明しよう。」

「私たちは、今回別の任務でブリトルボーンに来ていた。ホワイトアウターのコア技術が欲しい誰かさんにとっては願ってもない好機だったわけだ。でも私達の機体が置かれているクローゼットは特別だ、ホワイトアウター以外には開けられない。で、その誰かさんは考えた。アウトサイダーによる機体の持ち出しを装えば、必ずホワイトアウターが出てくる。その時にホワイトアウターの技術が見られる。」

アンゴラは、ホワイトアウターの見解を教えた。

「それでも、ホワイトアウターの技術は見れないけれどね。ヒヒヒ」アンゴラは勝ち誇ったように続けた。

敵わない。ホワイトアウターというのは、どれほど強大なんだ。

カーライルは目眩いがして頭を抱える。

そして、こうも思った。

そんな相手(ホワイトアウター)に挑戦して技術を盗もうとする組織は、とんでもないバカか、とんでもない挑戦者だなど。

「ん？でも、そんなの捕まえたあの整備工から聞けば。」カーライルの思考が口に出た、悪い癖がまた出る。

ながい沈黙が流れる。

そうだ、私(カーライル)が帰ってくるなり、先に取り調べられるということは。

あの若い整備工は死んだのだ。

おそらく自分で命を断ったのだろう。

ホワイトアウトに捕まることを恐れたのだろう。

いや、どうだろうか。

「命を捨ててまで盗み出す価値のある技術では無いんだけどね」

アンゴラは小さくもごもごと言った。

聞こえないように言ったのだろう。

でも、カーライルはそんな言葉聞きたくはなかった。

「さあ、おっさん取り調べは終わりだ！！」アンゴラが大きな声で言った。

部屋が一気に明るくなる。

目の前が真っ白になる。

眩しい。

目を開けてられない。

気がつくと、大破した020Xの前にいた。

曇りなき、闇なき、陰りなき、

狂おしいほどの、強すぎるほどの、塗り替えてしまうほどの、

白、シロ、しろ。

月皇 神久夜の両翼 ホワイトアウト

それはあたかも遙か上空から獲物を探す夜鷹の大翼のごとく。

「ねえ、いつになったら探すんですか？」 ロップは布団に向かって言った。

「んん、あと5分…」 布団からモゴモゴと声が聞こえた。

布団からゆっくりと細く白い腕が伸びた。

その腕は、何かを探すようにバタバタと畳を叩いた。

「んんっ メガネ、メガネ…」 わざとらしい声が発せられた。

「…っもう！！ メガネなんかいつもかけてないでしょ！！」 ロップは呆れながら突っ込む。

突然布団がめくり上がり、ネグリジェ姿の神久夜が満面の笑顔で姿を表した。

「えへへ～やっぱりい～ダメか～～///」 神久夜が照れる。

「褒めてないですから！！その斜め上なりアクションやめてくださいよ。」

「まあ、まあ、そんなことより、朝ごはんまだ？」 ボサボサの髪を掻きながら尋ねた。

「かぐやさま、朝ごはんを食べてから二度寝されたんでしょ、もう！！」 口調は静かだが目は笑っていないかった。

「あはは、冗談だってばあ！あはは…」 朝ごはんを食べたことを素で忘れていたなんて言えなかった。

「んで、探すって何を？」 神久夜は顔を傾けながら聞いた。

「はあ～、七宝ですよ！！七宝！！！」 ロップは起こると耳がピンっと立つ。

「ああ～、」 手のひらを拳で叩いてポンっとならすジェスチャーをしてみせる。

「探す探すっていつこの約2000年何一つ探しだせてないじゃないですかあ！！」 耳がピコピコと動く。

「だってさ、銀世界を探してみないんだからさあ。もうあそこしかないじゃん」 呆れ気味に返事をする。

「わかってるんだったらなぜ…」

「だって怖いじゃん、蒼の世界だよ。」 神久夜は本音を言った。

「私達を追い出した、あの世界に探しに行くなんて怖くて嫌なんだもん。」 ちょっと子供っぽく駄々をこねてみせた。

「わかります、しかし、アレが蒼の世界の者に渡れば、銀の世界は終わりなんですよ。」 ロップは進言した。

「我々月兎を蒼の世界に送り出してください。そうすれば、」

「ダメ、絶対。」 神久夜が大声で遮る。

「ハイリスクな一手は絶対に打たない。」 静かな声で呟いた。

「はい、この話は終わり！！」

「わかりました。」 ロップは静かにこたえた。

「んっ？」

「どうかされたのですか？」

「ちょっとまって」神久夜の指がロップの口にあてられる。

「…」

「フフフフフフ、アハハハハ！！！」神久夜が突然笑い出した。

「えっええ？」ロップは何がなんだか分からない。

神久夜の目はうるうると輝いている。

そして、ロップに抱きついた。

ロップのたわわな胸の間から顔を出し、こう叫んだ。

「やっと完成したんだよ！！！He3炉が！！！」

「ヘスリーろ？」ロップは思わず聞き返した。

「そう、今Miiesを通して、土星で資源採をやっているライラックから連絡があったの！！He3核融合炉が完成したってね。」

「っへ、HNFR (HeNuclearFusionReactor) 計画ってまだ動いていたんですか？」とっくの昔に凍結されたものだとロップは思っていた。

そして、ここ数百年見ないとおもったらライラックは土星に行っていたのかと。

「当たり前！この計画が完成しないと銀の世界の二手目はないからね。」

神久夜は満面の笑顔で腕を腰に当てた。

MIIES パラレルデバイス

あんなことがあった後だ、身体中に疲労を感じながら我が家を目指す。

各プラントを結ぶレールウェイに乗り込む。

ファンというVVVFインバータの音を聞きながら、列車の振動に揺られる。

乗り物に乗るとついウトウトしてしまう癖があるカーライルであった。

そんな中、ふと列車内の広告に目がいく。「新型MIIES 発売！！」新型が出たのかとそのままの感想を抱く。

そういえば、妻のMIIESはかなりの旧式だ。そろそろ新しいものをプレゼントするのもよいかもしれない。

MIIESの誕生は月の世界を変えた。

そう、述べる人は多い。

MIIESは、簡単に言えば人の思考の並列化装置である。

感情や思考をダイレクトに相手に伝えることを可能にする。

言語による誤伝達はなくなり、真に伝えたい情報を伝えることができる。

また、遠隔制御装置という側面も持つ。

例えば、カーライルが人型大型機動兵器を限りなく少ない遅延で正確に制御できるのもすべてはMIIESのお陰である。

しかし、MIIESは負の側面も持つ。

並列化され、情報が共有されるということそれすなわち、全てが筒抜けになるということ。

秘匿性がなくなり、すべてがフラットになった。

すべてが筒抜けになるというのは、発信者にとっても受信者にとっても気持ちのよいものではない。

どの時代でも嘘はよくないと親は子に教えるが、嘘がない、本音しかない世界はそれ以上に窮屈であった。

そのため、今では親しき中同士でしかMIIESでの思考情報のやりとりはされていない。

真に心通うものだけの間でMIIESの接続はされている。

もうひとつの府の側面も持つ。

それは、監視社会の到来である。

月の都のあちらこちらに甲冑のような人形があちらこちらに飾られている。

なにか暴動や犯罪が起きると直近の甲冑人形が動き出し事の対処にあたる。

MIIESは思考のフラット化と制御機器の遠隔操作も可能にする。

その甲冑人形は、リバイバルチューンと呼ばれ、月の民から恐怖と畏敬の念を注がれている。

リバイバルチューンの外部使役者が誰なのかは月の民は知らない。

このリバイバルチューンの設置によって犯罪率はぐんっと減った。

MIIESは、人々に損失のない情報伝達手段と安全を与え、プライベートと自由を奪った。

それでも、民にとっての利益が大きかったため、今ではすっかり皆慣れてしまっている。
監視社会も慣れれば案外悪くないと思った月の民も多かった。

カーライルは駅を降り、家路に急ぐ。

家が近くなると妻との双方向送受信可能エリアに入る。

脳に直接語りかけてくる、知った声、心地よくて嬉しい声。

（おかえりなさい、あなた）

妻の優しい声がカーライルの疲弊した心層に響く。

研究開発棟全体が揺れる。

全長数十キロに及ぶ資源採取船の中心部にある研究開発棟が揺れる。

揺れる、揺れる。

霊知の神のちからを内包したそれによって。

成功した。

我ら銀の民の悲願の一つが目の前にあるのだ。

神久夜に褒めてもらえる。

頭ナデナデしてもらえる。

よく頑張ったねって抱きしめてもらえる。

あの、甘い匂いをまた胸いっぱい味わえる。

嬉しくて嬉しくて。

好きで好きで大好きなあの人のために頑張った自分をライラックは褒めたかった。

「うううああああああああああ」ライラックも知らずにHe3炉の前で叫んだ。

「よくがんばったね。ライラック。さあ戻っておいで。」ライラックの頭の中に神久夜の声が反響する。

すうっとライラックの体から力が抜ける。

見上げた天井には白色の灯りがついていた。

瞬間、その灯りは朱に染まった。

非常事態かと思ったがそうではない。

サイレンが鳴っていないためだ。

では、なぜ赤い。

ライラックはすぐにわかった。

自分の体中から血が噴き出していた。

ライラックは鏡面の床になだれ落ちた。

なぜ血が出たのか、その原因を解析できる意識はなかった。

事切れてしまったのだ。

月兎はその全てを彼女に捧げる。

神久夜がそれらに与えるは、快樂と狂気と愛情と恐怖である。

月兎とは神久夜であり、月兎はすべての個体を総じて個であり続ける。

その関係性は主従でもなく、血縁でもなく、ましてや支配でもない。

プラスマイナスや雌雄、電場と磁場の関係のようなものだ。

つまり、もっと根源的な関係性であり、突き詰めれば分け隔つことすらバカバカしくなる。

「いやいや、とりあえずビールと枝豆的な関係じゃね？」神久夜はぽつりつつぶやく。
あぐらを掻きながらビールをコップに神久夜は注いだ。

「いえいえ、それを言うならば、コーヒーとミルクのような関係では？」ロップは神久夜の後ろから言った。

「混ぜると丁度いい的な？」神久夜は後ろに向かって言った。

「どうでしょう、ただライラックはミルクコーヒーが好きだったから。」ロップは用意したコーヒーとミルクに目を落としながらハニカミながら言った。

大型資源採掘船はHe3炉と一匹の遺体を乗せながら、ゆっくりと月を目指す。
それぞれのあるべき、かえるべき場所へ戻るため。

(おかえりなさい。 今日の晩御飯はコロツケよ。)

MIIESを通して妻のミラから献立が伝えられる。

ビール冷えてる？

(もちろん、銀麦がキンキンに)

よしっ！カーライルは帰りながら少しだけガッツポーズした。

他の通行人にバレないように小さく小さく。

(でも、お風呂が先だからね。)

わかってるって。

外がカリカリ、中アツアツのホクホクポテト。

それをハフハフ言いながら食べる。

そして、それからキンキンに冷えたビールで流す。

ああ、もう想像しただけで。

(今どのへんなの?)

グリーンウッドブロック近くかな。

(じゃあさ、リーンスフィアのフリーペーパーがあるはずだから取ってきてよ。)

はいはい。了解！カーライルは呆れ気味に返す。

リーンスフィアは今、シルバースティッチ(銀縫いの都)で流行しているおもちゃだ。

全長20cmほどの人形を使って遊ぶ遠隔操作型のおもちゃである。

無論、操作にはMIIESが使われる。

妻のミラは昔はこれといった趣味はなかったが最近はこのリーンスフィアにハマっている。

この前も町内大会に出て優勝したとか言っていた。

角を曲がると目的のフリーペーパーがあった。

それを1部取って家路に急ぐ。

大型のマンション郡が立ち並ぶ。

均一な斜陽光を無機質な立方体が様々な方向に照り返す。

そそくさと公園を兼ねた広場を抜け、エレベーターに乗った。

自分の階で降りる。

扉の前に立ち、MIIESに意識を集中させる。

ガチャッと音がなる、ロックが解除される。

「たっだいまぁ！！」カーライルは大きな声を出す。

「おかえりい〜」ミラが壁伝いに歩いてくる。

出張が続いていたため、ミラの顔を久しぶりに見る。

特に変わりなく元気そうな顔にほっとする。

ミラは目を閉じたままニコリと無言で微笑んだ。

ミラは先天性な傷害で目が見えない。

それでもMIIESのお陰で生活に支障はない。

生活空間に存在するすべてのセンシングデバイスが彼女の五感となり、すべてを彼女に伝える。

お風呂に入り、コロッケで晩酌をしてミラと少し話し込む。

それからもう一度お風呂に入った。

そして、ミラと一緒にベッドに入り休んだ。

これから待ち受ける新しいトラブルのために心身をじっくりと休めた。

木星圏からの帰還者

あたたかい。

ふんわりと包み込む。

粘性の高い液体が体を優しく撫でる。

手を動かすと指の間をそれが通った。

目を開けてみる。

視界は印象派の絵画のように全てがおぼろげだった。

(・・・!!、　　ごぼぼぼあばおぼ)

なんだか、不思議な言葉が聞こえる。

手を声のする方へ伸ばす。

何か無機質なものに当たる。

そして、理解する、自分のいる場所が密閉された空間だということ。

・・・　ああ。そういことか。

円柱の構造体から液体が抜かれていく。

円柱が崩れ、外の世界へ引きずり出される。

「調子はどう？　　ライラック。」

神久夜は少し心配しながら声を掛けた。

「うう　ウエエエゴバァオロロロロロ・・・

ライラックは吐きたいものを吐いた。

吐瀉物が神久夜の服にかかった。

「ずびませえ」　おろろろろ　おおおお　えええ

また吐瀉物が服にかかる。

神久夜は屈んでライラックの背中を優しく撫でた。

「生まれて初めて使う体なの。ゆっくりね。」

神久夜はにっこりと微笑みかけた。

ライラックは久しぶりのその笑顔を見て気を失った。

「大丈夫なの？」神久夜はポーリッシュに尋ねた。

「ああ、大丈夫ですよ、生体情報の伝送損失は1パケットもないですから」

「ただ、新しいハードウェアと以前のソフトウェアのギャップがまだあるようで、体が言うことを聞かないんでしょう。」

「それもそのうち、ファームウェアがアップデートしてくるでしょうから大丈夫です。」

「・・・わかった。」

ポーリッシュはいつももう少しわかりやすく話してくれないものかといつも神久夜は思う。

心地よい日向と風がライラックの体を撫でた。

目が醒め、体を起こす。

扉が開いて、コーヒーを持って神久夜が入ってきた。

ただ、手元がかたかたと震えている。

続いて、クスクスと声を押し殺して笑いながらロップが入ってきた。

「顔色もだいぶ良さそうね。ライラック。」

「ええ、先程はすみませんでした。神久夜」

「いいの、いいの。それよりコーヒー飲みましょう。牛乳をたっぷり入れて！！」

神久夜は満面の笑顔で言った。

「敵わないなあ。」ライラックは嬉しかった。

「それ、姫様が入れたの。味はどうかしら？フフ」ロップが笑いながら言った。

「五月蠅いわね。私が淹れたんだから美味しいわ」

ライラックはミルクをたっぷりを入れて飲む。

懐かしい味。

正直言えば、ヌルいし素人が入れたコーヒーそのものであった。

でも、神久夜と一緒に飲むコーヒーは特別で美味しかった。

「ヌルいわね、ロップちゃんとお湯沸かした？」

「何言ってるんですか全部用意したの姫様じゃないですか」

「ライラックのために全部用意するんだって言って、私が手伝うのを止めたじゃないですか」

「何もそこまで全部言わなくてもいいじゃない！そこはうまく合わせときなさいよ」

「はいはい、」ロップは呆れて、そして三人でクツクツと笑った。

「おかえりなさい。ライラック」

我慢できずに神久夜はライラックに抱きついた。

神久夜の甘い香りが鼻をくすぐる。

「ただいまです。 神久夜」

カーライルは、出張精算書と作業報告書をサービスエンジニアリング部の事務室へ出しに行った。

その帰り際

「あ、あの、カーライルさん！！」

人を呼び止めるには少し音量が大きかった。

周囲の人間の視線というかベクトルというべきものを集めてしまった。

振り返ると想像通り、あいつがいた。

「僕は、技術開発局のテディルって言います。」

話しかけた奴は爪を弾きながら、視線は真横を向けて喋っていた。

「知ってるよ、その自己紹介から始めるのやめないか。」

幾度となく繰り返した返事をカーライルはした。

「だって、もしかしたら相手が僕のことを忘れてるかもしれないじゃないですか。」

「お前みたいな強烈なキャラの社員、誰も忘れないから。」カーライルはため息混じりに返す。

「で、何？」

「あ、あの、ライブシーク社の機体と戦ったって……。」テディルは目をキラキラさせながら話そうとした。

慌てて、テディルの口を塞ぎ、一目散に空いているミーティング室に、連れ込んだ。

「おい！何で知っているんだ！！」カーライルは音量だけを落として、テディルに凄んだ。

「あ、やっぱり本当だったんですね。！！！」テディルの顔がますます明るくなる。

こいつ、カマかけたのかよ。じろりと睨むとすぐにテディルは目を逸らす。

「お前それ、誰から聞いたの？」

「サム爺さんが、回収したSAL020Xのレイヤー装甲のダメージから、これはライブシーク社の加速粒子の後じゃないかって。」

あの爺さん、ホワイトアウトの偽装を見破ったのか。

「で、勝ったの??僕のSALシリーズ。」

「負けたけど勝たせてもらったよ。あと、お前のSALシリーズじゃないから。」

「負けたけど、勝った??どういうこと??」テディルは考え込んだ。

「どうでもいいけど、このこと言いふらすなよ。じゃあな。」カーライルは、部屋を出ようとした。

「待ってよ、カーライルさん、もっと詳しく教えてよ！！」

「嫌だ、忙しいの。」

「僕からも情報を提供するから。」

カーライルはピタリと足を止めた。

「何について」カーライルはもう一度じろりと睨む。

テディルはまた、壁に向かって話し始めた。

「次の次世代規格がムーンカウンターから提示されたんだよ。」

「よし、そこで座って話そうか」

「いや、開発局まで行こうよ」

しゅしゅ、カーライルは技術開発局へ足を伸ばすことにした。

同じ敷地内とはいえ、やはり遠い。

歩きながら、カーライルはテディルの肩を叩いた。

びっくりして、テディルはオドオドしながら振り向く。

カーライルは自分の首をトントンと指さしてみせた。

テディルが嬉しそうな顔になって、すぐに首元のMIIESの電源を入れる。

カーライルも自分のMIIESをONにした。

「コードは？」テディルが歩きながら小声で話す。

「Wisper」カーライルも小声で話す。

「了解！」

カーライルとテディルはMIIESを通して、繋がった。

技術開発局へ向かう途中にカーライルはテディルにライブシーク社のLLASとの戦闘について伝えた。

無論、ホワイトアウターの件は伏せた。

技術開発局が見え始めたところでカーライルの話は終わった。

ありがとう、カーライルさん。

僕からの情報、次の10カ年規格、いわゆるnext stageについてすこしだけ話します。

こいつMIIESで話すと流暢になるな、カーライルはいつも不思議に思う。

全部聞こえてるんですけど。まあ、いや、次の次世代規格は”LoE規格”と呼ばれています。

ろえ規格？

いや、Lなので、ルウエ規格です。

こりゃ、ご指摘どーも。で、なんの略なんだ？

”Legs on Earth規格”です。

カーライルは立ち止まった。

テディルは、構わず、技術開発局の方へ進んだ。

季節は秋の終わり、ABAS社構内にはイチョウの木が整然と植えられている。

風が吹いて、黄色い葉を巻き上げる。

テディルが振り返る。

彼女の長いボサボサの髪も風の流れに従う。

社則違反の改造した彼女のスカートもひらひらとなびく。

テディルは、カーライルをじっと見つめる。

そして、MIIESを通さず、はっきりとこう言った。

「地に足をつける時が来たんです。」

地に足をつけた戦闘

西暦2020年

中東のパジルスタンへ派兵されていた平和維持軍は情勢不安になった隣国へ移動していた。

「分隊長、また移動ですよ。」

「何が言いたい？」

「いやね、治安維持活動に戦車なんていないんすよ。」

荒れ地を進む戦車の中で慣れきった振動が体を揺らした。

「確かに、派兵されてから撃て！(Fire!)なんて一度も言ってないな。

だがな、武力を行使することなく役割を終えることは人間にとってもこいつ(戦車)にとっても幸せなことだと思うぞ。」

「まあ、そうっすね。」

「それが上官に対する返事か。はあ。」

「「「ははは、」」」車内に笑い声が広がった。

弛んでいることをたしなめたかったが、また派兵先で緊張の日々が続くのだ。

今回は特に何も言わないことにした。

「分隊長、チャーリー小隊も合流しました。」

通信兵が報告した。

「履帯が外れて遅くなっていたやつか」

戦車小隊が複数集まり、中隊規模の行軍となっていた。

「はあ、はあ、・・・うっ ゴホゴホッ」

(ちょっと大丈夫?)

「久しぶりの1Gなので、ははは。」

(これは大事なデータ取りなんだからね。)

「わかってます。」

(MカインとBブースト投薬!)

「えっ ゴホゴホッ 大丈夫ですって。痛っ！」

精神安定剤と反応促進剤が注入される。

機内には、リアクターの高音が響く。

一瞬、耳鳴りがする。

「データロギングオン、WL解除、リアクタバイパスラインオールグリーン。BWオン。」

(いい?)

「了解。MIIESフルコネクト！ 発進。」

ゴゴゴゴ、鉄の巨人が大地を蹴った。

「おっと、忘れてた、ACP展開！！」

(大丈夫なの。本当に??)

「大丈夫ですってえ。 Phase1開始。バンカーブラスト、Fire！！」

巨人の両足から鉄槌が打ち込まれ、爆発を起こした。

一瞬にして周囲の地面をえぐり、砂嵐を起こした。

最初、炎のようなものが見えた、しかし今見ると砂嵐にしか見えない。

「ぶ、分隊長殿。 前方に砂嵐です。」

「何？天気予報ではそんなこと言ってなかったぞ。」

分隊長はハッチを開け、外に身を乗り出した。

確かに砂嵐に見える。

「はあ、はあ、 え、M1 Fire！！」

バシューウウウウ！ ミサイルが射出され自走しだす。

分隊長は見た。

砂嵐の中からミサイルが飛び出し、先頭車両に当たった。

爆炎が上がる。

「おい！ 地球に降りる気なのか！！」

「ムーンカウンターはそのつもりのようですね。」

想像以上だった、カーライルは怖くなった。

地球に降りるということ、それは侵略戦争をすることか。

今まで、月の資源を守るために軍事企業のサービスエンジニアとして幾多の戦場を駆けてきた。

それも、防衛戦争という大義があったからだ。

地球に降りて勝算があるのか・・・？

イルさん！・・・カーライルさん！！

MIIESを通してテディルが語りかける。

落ち着いて、軍の上層部もすぐには、侵攻したりはしないと思いますよ。

それに侵攻するとは決まってませんし、基礎システムを作るように働きかけているだけかと。

そうじゃない、そうじゃないんだ、テディル。

カーライルは、MIIESの通信接続を切った。

「あの、カ、カーライルさん大丈夫ですか？」

MIIESの接続が切れていることを確認して心の中でカーライルは叫んだ。

（そうじゃないんだ、我々メーカーに作らせようとしているということは、ホワイトアウターには地球に降りて軍事行動ができるだけの十二分な技術力があり、既に行動を起こしているということなんだ。）

（ホワイトアウター、お前たちの狙いなんなんだ？、何がしたい？悪戯に戦争がしたいだけなのか）

カーライルにとって、LoE規格の提示はそれほどに衝撃的なものだった。

「カーライルさん、実は新型機を見せたくてここまで連れてきたんです。」

テディルはエレベーターのスイッチを押した、そして、地下6Fのボタンを押す。

「えっ 新型機？ 聞いてないぞ。」

「ええ、ABAS社内でも、割りと秘密でしたし。」

「ちょっと待て、新型機はいいが、SALシリーズのアーキテクトフレームの脆弱性問題は怎么样了？」

「それは、優先度が下がり、私達汎開1G（汎用開発第1グループ）は手を引いてます。」

「何を言っている？、あの問題は機体の消耗を増やし現場のコストアップと安全性低下を招いているんだぞ。」

「Non of your Businessです。」

呆れて、怒る気にもならなかった。

これが、開発局と現場のサービス部の意識の差なのか。

エレベーターのドアが開き、深淵の闇が広がった。
テディルが壁に手を当てる。フロアに光が満ちる。

純白の巨大な鉄の女性が光で照らされた。

この機体を見た瞬間に、さっきまでの腹立たしさが、スッと消えてしまった。
テディルが胸を貼り、こういった。

地球衛星軌道強襲用機体 OAL-02

通称、アマツミカ

どう？ かわいいでしょ？

鉄の巨人との遭遇

分隊長の目には、先頭車両にミサイルが直撃した瞬間が映った。

何が起こった。

レーダーには何も映っていなかった。

なぜ、攻撃を受けた？

テロリストのRPGか？

いや、この目で見たミサイルはRPGなんかじゃなかった？

完全に混乱した。

「はあ、はあ、先頭車両1両撃破、管制確認できるか？」

「こちら管制、確認できている、残り9両？いけるか？」

「いける！、ただし、FCS系のバックアップを頼む、想像以上にこのFCS、思考負荷が高い。」

「了解、無理はするなよ。トリアンタ。あと、・・・」（思考負荷を減らすためにMIIESによる通信応答は無しにする。）

「すまない。」「有視界戦闘に入る。Go ON!」

鉄の巨人と戦車との人類初の戦闘がはじまった。

「っ・・・、全隊に告ぐ、敵襲を受けた。戦闘用意」

砂煙の中からどう見てもロボットとしか見えないものが走りだした。

「な、何でありますか？あれは、分隊長！」

「わからん、全隊オールウェポンズフリー、目標は未確認機。」

「全隊、フレンドリーファイヤに注意、弾発は3点バーストに指定。散開！」

ブウロロロオオオオオオオオオ！

戦車は一気に走り出す。

残りの戦車は9両、一気に走り出す。

鉄の巨人も走り出した。

「ACPの循環コヒーレント値は、注視しろよ。」

「了解、それよりもFCSのバックアップをしてくれよ。」

「わかっている、5秒後に2時方向に仰角10度でM2発射しろ。」

「了解。」

（くそっ、姿勢制御系のダンパー値が低い、もっと早く反応してくれ！）

オプティカルセンサーのマーカに戦車が入る。

「M2 Fire！」

ヴァッシュウッ！！

ミサイルが当たり、戦車が爆炎に包まれる。

何なんだ、あれは。

二足歩行しているのになぜあんなに高速移動できるのだ。

鉄の巨人は戦車の移動速度よりも早くしかも軽快に大地を蹴った。

しかも、こちらの砲撃を予測しているような動きだ。

「ぶ、分隊長！」

「何だ！」

「通信傷害が起きております。」

「そんな報告後にしろ！」

「トリアンタ、7時方向、砲撃当たるぞ、M4、M5で牽制しろ。」

「はあ、はあ、うはあ、ゲホッ」

「おい、大丈夫か？」

オプティカルセンサー越しにもわかる。

自分が疲弊していることが。

「どうしますか？トリアンタから、オペ権を取りますか？」

「はあはあ、まだやれる！！」「M4、M5Fire！！」

「だそうだ・・・。「しかし、神久夜、、、」」

「残り、5両！ Mカインさらにブースト！！」

トリアンタは自分でMカインを注入した。

感応係数上がる。

ビィィィィ、

「何が起きた？」「感応係数を上げすぎたために機体がついてこれなくなったみたいです。」

「うああああああああ！！！！！！」

「おちつけ、トリアンタ！！、お前は自分が誰かを強く認識する必要がある。」

「うああああああああ」

おかしい、今自分の手を見ているはずなのに、私の手はこんな鉄で出来ていたっけ？

義手？いや、それよりも何で戦っているんだっけ？

ていうか、周りのコレはなんだ？

鉄の巨人は動きを止めた。

「敵は動きを止めたぞ。」

「一斉射!!!!」

砲塔が鉄の巨人に向けられて一斉に火を噴いた。

次々と着弾する。

鉄の巨人が爆炎に包まれる。

「トリアンタ！！ 応答しろ」

「機体は？」

「問題無いです。ACPが機体の周りをうまく循環してますから。」ポーリッシュが静かに答える。

「Box1、ページ。M6からM12、全弾射出。投入軌道値、MIIES制御。」

「大丈夫？トリアンタ」

「問題無いです、姫様。」

どうしたの？神久夜がポーリッシュに尋ねた。

完全に自分を取り戻してますね。どうしたんでしょうか？

ベクトラム曲線を指しながらポーリッシュは答えた。

鉄の巨人から射出されたミサイルは全て上空で軌道を変えた後、残りの戦車へ命中した。砲塔部が破損した戦車が走りだした。

鉄の巨人目掛けて。

「よくも部隊を、貴様ああ！」

分隊長は、生き残った兵士を逃して特攻をかけた。

「バンカーブラスト！チャージ。」

「おい、もう目的は果たした、相手にしなくていい。」「後退しろ！」神久夜は叫んだ。

ACPの循環膜を突き破って戦車が鉄の巨人にぶつかった。

しかし、ACPによってその運動エネルギーは消されてしまっていたため、助走した意味はなくなっていた。

分隊長は、ドライブに入れっぱなしにして、壊れた砲塔から身を乗り出した。

「こなくそおおおおお。」アサルトライフルで鉄の巨人を撃った。

そこで改めて、鉄の巨人の姿を間近で見た。

これはロボットなのだと。

頭と思しき部分には無数の目のようなものがあり、それが一斉にこちらを向いた。

「くそ、くそ、くそおおお」

オプティカルセンサー越しに見るその男はそう叫んでいた。

「ブラストオン！」

爆炎が広がった。

戦車が軽々と吹っ飛び、全てを消した。

「トリアンタ、命令には従え。」

神久夜は、力無く言った。

Orbital Assault Layered system

「アマツミカ・・・」カーライルは力無く呟いた。

「そう、天津甕星型1番機、アマツミカです。」テディルは、鉄の女性を見上げてゆっくり言った。

「あまつみかほしがた1番機？、宇宙艦みたいな名前の付け方だな。」

「そうです、うちの経営層は、この機体を大量生産する気はありません。」

「粗悪品の大量生産をやっと止める気になったのか。」カーライルは毒づいた。

「それもあるかもしれませんが、軍の意向というのが大きな理由でしょうね。この蒼銀戦争は、我々にとっては、防衛戦争であり、数の上では圧倒的な不利な状態です。それに対抗して、私達も大量の軍事兵器を投入してきました。しかし、多くの兵士たちが命を落とし、戦線は後退するばかりです。それもあってか、世論の軍事企業への風当たりも強くなっている。うちの株価も右肩下がりで。」

「なんか、話それてないか？」カーライルはツッコミを入れる。

「すみません。ですから、私達の得意とする兵器の質をより上げて一騎当千をなせる兵器を作るよう、前々回の軍事規格でお達しが出たのです。EAA(Exceeding All Arms)規格です。数に数で対抗したのでは死屍累々です。そうではなくて、「軍事作戦目標を短時間に、効率良く、損失なく、攻略する」これが軍からの最大の要求でした。そして、作戦目標は地球軌道上に点在するユニオンの軍事要塞です。それに対するABAS社の回答がこれ(アマツミカ)です。」

「ふーん、で買って貰えそうなの？」そう言いながら、カーライルはアマツミカの後ろへ歩いて行った。

カーライルはその途中、ぎょっとした。

この機体、スカートやリアヴェールの裏側にこれでもかという程の無数のスラスタークーベーンを搭載していた。

「いえ、半年後のコンペで良いデモテスト結果を出せば、勝って貰えそうです。」

「そうか・・・」

しかし、このアマツミカ、なんというか美しい。

本当にカーライルはそう思った。

純白の肌に華奢な体幹、本当に女性そのものであった。

この状態が基本フレームのため、ここから外殻などの多層装甲などがついていくのだろう。

それでも、こいつの美しさは変わらないだろう。それはわかった。

「フフン、どうです見惚れちゃいました？」テディルが珍しくこちらの目を見て自慢気に語る。

「ああ、本当に美して格好良いな。」カーライルは素直に認めた。

「本当はいけないけど、火を入れてみましょうか？」

「おい、いいのか？」

「大丈夫です、ばれないです。それにエイジングも必要です。」そう言って、テディルは、自分

の首筋に手を当て、ブツブツとつぶやきはじめた。

パチン、パチン、何かが機械的に動き始めたような音がした。

そして、

Fooooooooooooonnnnnnnn!!!! 高音が鳴り始めた。

アマツミカのフレームが軋みはじめ、機体のあちこちの状態表示LEDが光りはじめて緑や赤をなし、システム状態を教え始めた。

カーライルはドキドキして手が震えた。自分でもなぜだか分からない。

なぜ、こんなに鼓動が高鳴るんだ。

間もなく、アマツミカの4つの目に瞳が映った。強い意思を内包するかのような悲しい瞳、何故かカーライルにはそう思えた。まるでMIIESを通してカーライルの深くに語りかけてくるそんな気さえした。

カーライルは首筋に手を当て確認する。確かにMIIESはOFFにしている。

「高圧縮粒子循環炉安定確認。インターラインの接続は省略。セーフモードで起動!!!」

さらに、テディルは声高らかに叫んだ。

「ACP展開!!!」

その瞬間、アマツミカの周りに爆風が噴いた。火炎は見えなかったがものすごい風圧が機体を取り巻いた。

たまらず、カーライルは後退りする。

「これを見せたかったんです。カーライルさん。」テディルが駆け寄ってきて耳元で大声で言った。

ものすごい爆風で目も開けていられない。

たまらず、カーライルは自分のMIIESの電源を入れる。そして、テディルへアクセスした。

おい、何をしたんだ、テディル。エクスカーション(反応炉が暴走状態になること)か??

失礼な、違いますよ。テディルはカーライルにMIIESを通して言った。

言ったじゃないですか、ACPを循環させるって。

ACPってなんだ?

機体循環粒子(Armor Circulating Particle)のことです。機体の周りに反応炉から生成された活性粒子を循環させて慣性力場を形成して機体の運動性能の向上とありとあらゆる質量兵器を無効化する技術です。

なんだ、要するにバリアみたいなもんか?

そう、それです。テディルは嬉しそうに言った。

会議とはこういうものだ

少女は、ただひたすら歩いた。

細長い回廊。

明るく照らされている。

少女の後には、女性が静かに付いて行った。

ただ、少女との距離は常に一定であり、言葉通り付かず離れずだった。

少女はエレベーターに乗ったり、また通路を歩いたりを散々繰り返し、ある大きな扉の前に着いた。

そこで、立ち止まった。

思わず、後ろの女性が声をかける。

「あの、入らないのですか。」

「もちろん、入るよ。」少女は抑揚なく答える。

その瞬間、扉が開く。

中では軍服を来た6人とスーツを来た6人がいた。

それぞれ、テーブルに向かい合うように座っていたが、少女を見るなり全員席を立った。

「お待ちしておりました、月皇」手前の中年男性が少女を見て言った。

誰も彼女が下着姿なことにツッコミは入れなかった。

ただ、奥の席に座っていた中年女性だけは、少女のお付きの高身長的女性を睨んだ。

その視線に気付いたのか、高身長的女性は眉をハの字に曲げ、「だって仕方じゃないですか〜。

」という視線を投げ返した。

「さて、みんな！！さっそくやろうよ。」少女は嬉しそうに全員に笑顔を向けた。

「いつも通りですか。」誰かが尋ねた。

「もちろん！」少女は首筋をトントンと軽く叩いた。

全員、首筋へ手を持っていった。

みんな目を閉じた。

少女も含めて皆席へ着いた。

そして、ゆっくりと目を開けた。

全員同じものを見た。様々な色がまばゆく輝き、皇ぎ、それぞれがそれ自信を主張しつつ、決して他に干渉せず、しかし、全体としての質を高めた。

そんなこの世と思えない世界がこの12人と2人の前に無限に広がった。

でさあ、どうすんのLipseec社の件。会議ははじまった。

あのお、その件ですが時間のコンペから外すというのはどうでしょう。

しかし、そんなことをすれば、公に理由を求められますよ。

まさか、ホワイトアウトの技術奪取未遂で制裁を受けてもらいますとも言えないでしょう。
それはそうだが。
皆口々に思いを語った。

というか、月皇、Lipseec社が技術を盗もうとしたのというのは本当なのですか？アウトサイダーだ
という可能性だってあるんですよ。

本当だよ。ねえ、ロップ。少女は右後ろにいた高身長的女性に目を向けた。

ええ、本当です。アンゴラが脳みそを開けてデータドレインしたそうなのです。その時の映像も
ありますよ。見ますか？。ロップは目を閉じて再生の準備をしようとした。

いや！いいですいいです。

わ、わかりましたから。

皆慌てて、ロップを止めた。

そ、そうですか。 ああ、せっかくの会議ですから時間は有意義に使わないといけないです
からね。

いや、そうじゃないから。 皆、同じことを思った。

えっ、違うんですか？ ロップは不思議な顔をした。

話逸れてるう。少女は議題を戻そうとした。

とにかく、月のルールを守れないものには、相応の罰を与えなければなりませんからね。スーツ
の男が議題を戻した。

次回のコンペでは各社、最新鋭の技術を投入した機体を披露してきます。

ほんで。少女は愛の手を入れた。

そこで罰を与えるのはどうでしょう。

ふむふむ。

うーん、Lipseec社の機体を破壊して他社にその残骸を回収させるというのはどうでしょう。

おっ、それいいね。目には目をだね。

特に次回コンペでは、新興の軍事企業も出ますから、Lipseecの残骸回収は技術的参考になるでし
ょう。

しかし、どこで、どうやって、誰が、どんな風に破壊します？

確かに。

月皇、ちゃんと考えてます？

う、五月蠅いなあ。それを考えるのが、ここにいる軍官や政治家の考えることでしょ？

まあまあと皆がロップをなだめた。

確か次回のコンペはかなり地球に近い宙域でしたよね。

ええ、そうです。地球軌道上の要塞攻略用の機体の選定デモンストレーションテストなので。

えーと、キャンサーハンズM2(宙域の名前)でしたっけ。

よく覚えてるね。

私が次回コンペの選定責任者なので。

ということは、そのM5はユニオンのデブリがたくさん浮いてるところですね。

ユニオンのデブリがあるってことは・・・。

おそらく、不発の感知型誘導ミサイルもあるでしょう。

たまたま、ミサイルが起動してLipseecに当たってもわからない。

不運な事故で済みますな。ははは。

よし、それだ。それでいこう。

ミサイルの設置はホワイトアウトがしておきます。ロップは皆に視線を送った。

くれぐれも他社に被害が出ないように頼みますよ。

ええ、わかっています。

ただ、ユニオンのミサイルとホワイトアウトのミサイルじゃあね・・・。

確かに。何人かは笑っていた。

まあ、それもホワイトアウトに任せてください。証拠隠滅は得意ですから。

おお、怖い。

話は済んだ？じゃあ、会議終わり。

少女は、ぱんっと手を叩いた。

一気にいつも通りの会議室に戻った。

じゃあ、みんなよろしくね。

少女の笑顔はそこにいた軍官や政治家には眩しかった。

アマツミカ出る！！ ・ ・ ・ のか？

ピピピッピピピッ

枕元で毎日聞いている不快な音になる。

・・・誰だ、スヌーズとかいうものを考えた奴は。

レイドは、布団からゆっくりと体を起こした。

時計を見る。・・・！！ やべっ！！急がないと！！

レイドは着の身着のまま家を飛び出し、駅へと向かった。

はあ、はあ、肩で息をすることはこういうことか。

レイドはやっと、軍港に着いた。

「遅いぞ！レイド！！」

もう、会社のみんなはいた。

「レイドはいつもどおりね。」「まったく」

社内のみんなは口々にレイドの遅刻のことを言っていたが、レイドには聞こえなかった。

「さあ、行こう、明日は大事なコンペだ。」

ABAS社のみんなは、輸送艦に乗った。

レイドは窓から宇宙を見ていた。

どうして、皆、戦争するのか。冷静になるとふとくだらないことを思ってしまう。

揉め事があっても、どうして殴り合いで解決するなんて発想になるのか。

学生時代の先生の言葉が今でも、想起される。

『戦争は広義の外交の一部であり、狭義の外交の失敗である。』

理性的に考えれば、理解できるが、直情的には腑に落ちない。

自分がもし今回のデモテストで良い結果を出して、うちの新型機が軍に採用されることになったら。

あの美しい機体は、何十万人という地球人を殺すのだろう。

地球衛星軌道上の軍事施設を攻撃するとはそういうことだ。

「どうした、緊張するか。やっぱり」うしろから声を掛けられた。

30代後半くらいの男がいた。

「私はSE部のカーライルだ。」カーライルは右手を出した。

「お r、私は、研究開発局、機動試験部のレイドと言います。」レイドは握り返した。

「君のことはテディルから聞いているよ、有能な怠け者だってね。」カーライルは笑いながら言った。

「あいつ、そんなこと、はあ。よろしくおねがいます。」レイドは項垂れた。「聞いていると思うが、今回ベルゲ・SAL102で随伴するよ。」

「助かります、もしものときはよろしくおねがいします。」

「そんなことは起こらないと祈っているよ。ははは。」

SE部の中堅どころが随伴してくれるなら安心だ。口には出さなかったが、レイドはそう思った。

-6時間後-

レイドはアマツミカのコックピットに居た。

最終調整とはいえ、ほとんどやることがない。

ーレイドさん、やっぱり緊張しますか？

レイドはチェックリストとコンソールの表示値を突き合わせ確認する。

ーおーい、やっぱり緊張してる系？

チェックリストから目を離して開いたコックピットから外を見る。

誰もいない。

ーパイロットのコンディション、あまり良くない。駆動系を+2補正。

「おい、勝手なことするな！」思わず声を荒らげる。

ーあー、やっぱり聞こえてるじゃないですか！

「いちいち、五月蠅いの！」

ーえー、やだやだ、構ってよおー。

ったく、コミュニケーションアプリなんて入れる必要があるのか。

五月蠅いだけじゃないのか。

ーあー、めんどくさそうな顔したあー！！

レイドは苦虫を潰したような顔になった。

こいつ、人間以上に人間臭い。しかも、ウザがらみ系だからなお質が悪い。

「フェイス！！」

ーハイハイ！何でしょう。私のスリーサイズ聞いちゃう？聞いちゃう系？

「パイロット支援システムの・・・」

ー遠回しに私のことね。何何何いー？

音量をミュートに設定。」

ーハイ、・・・ってやだあ〜。もっとおしゃべりしたいの！！

「うるさーい！！」

ビー！ ビー！

艦内放送が流れる。

『あと、数時間でキャンサーハンズ（宙域）に到着する。各社準備に入れ。』

「おっと、そういうことみたいだ、フェイス。じゃあなー。」

ーどうせ、すぐ後に私に会うのよ。へへへ。

「言ってる！！」レイドはアマツミカから降りて、最終ブリーフィングに行った。

レイドはブリーフィングルームに入ろうとしたが、軍人に止められた。

「ブリーフィングは宇宙服を着てからMIIESを通してします。」

「あ、そうなの。」レイドは知らなかった。

「なので、先に宇宙服を着て御社の機体の前で待機してください。」

「わかりました。」（思ったより早く、あのウザアプリ（フェイス）に会うことになりそうだ。うんざりする。）

レイドはトイレを済まして、ABAS社の更衣室へ向かった。

そこにはカーライルがいた。

「おっ来たか、早く着替えた方がいいぞ。」

「ハイ、」

甲冑のような滑らかな銀白色の宇宙服が堂々と待っていた。

「新型機とはいえ、宇宙服まで専用なんだな。」カーライルはまじまじと甲冑のような宇宙服を見て呟いた。

「こんなの着たくないですが、仕方ないですね。」レイドは明らかに重そうな宇宙服を見て返した。

「社内ではこれを外装と言ってたぞ。」

「外装ですか。確かにソッチのほうが、それっぽい名前ですね。」レイドは着始めた。着終わると内部ディスプレイが表示される。外の景色すらカメラ越しに見るしか無い。改めてこのスーツは異形だとカーライルは思った。

継ぎ目が見えず、メタルスライムが人型になっているような形だった。

さて、行くか。レイドはカーライルの方を見ようとした。

ーやっほー！ 言ったでしょ。 すぐ会えるって！！

聞き覚えがあるというか、少しの間でもいいので忘れてかった声が耳横のスピーカーから聞こえた。

「んもおおおおおお！！！」

レイドは両手を広げて、白色の面発光する天井に向かって咆哮した。

カーライルは目の前の人型のメタルスライムが突然天井に向かって体を仰向けにしだしたので、びっくりした。

高感応型爆雷の設置

「なんで私がこんな地味な作業しなきゃならないのよお！！」

「まあまあ、姫様のご命令ですから、ねっ」

フルコンシールされた白銀の機体たちがCM5宙域を進んでいた。

「私には、こうズギーンって突貫してドカドカーンって活躍する戦いが合ってるのよ」

「まあまあ、落ち着いて背中にいっぱい爆弾積んでるんだから。」

「ってというか、ハバナももっと活躍したいでしょ！！！」

『こらっ レックス！！ はしゃぎ過ぎよ！！』

「ええー、ていうか姫様のせいでしょ！！やだやだやだ・・・」レックスは駄々をこね続けた。

『ハバナ、レックスをお願いね』

「ふえええ、姫様そりゃないですよ・・・」ハバナはまたいつもの丸投げだと思った。

『レックス、ハバナもうそろそろじゃない？』

「確かに、もうこの辺だわ」レックスが答えた。

さっきの不平不満の嵐は収まったらしい、ハバナはホッとした。

「ん、じゃあ設置するよ、姫様」レックスは神久夜に確認した。

「全く、ホワイトアウターの高級な感応型爆雷を受けれるんだから、ライブシーク社は感謝すべきよね」

「えっと、ライブシーク社の識別コードに反応するように設定するんですよね？」

『ええ、そうよ。』

からだのあちこちにデブリが当たって痛い。

セミダイブ状態だが、機体へのダメージは搭乗者に反映されてしまう。

「あ痛！ はやく終わらせたいい～」レックスは地味な作業と痛覚のフィードバックにストレスを感じていた。

「レックス、もう少しだから、がんばろ！ ねっ」ハバナをレックスを励ました。

「なるべく大きなデブリの近くに設置しろなんて要望が多過ぎなのよ。」レックスはグチグチ言いながらも作業は正確にしていた。

「でもさあ、コンペってCM2でしょ？」

「そのようですね」

「なんでこのCM5に爆雷を設置するのかしら」

「それは・・・神のみぞ知るところじゃないでしょうか」

「なにそれ、ハバナ本気で言ってるの？」

『それは、あたしが説明しましょう！』

「姫さま・・・」レックスは思い出した、まあ姫様も神様だったけ・・・。

『CM2からCM5へ誘導するの。他社の妨害行動を装って。』

「妨害行動ってどこの会社がするんですか？」

『そりゃ、あれよ。-詠月教導興社-よ。』

「ええ、エイゲツがやんの??」

「えっ、ってことは、、、」

『そう、あんたたちが誘導すんの!!』

「「えええええええ」」

『話の流れからわかったでしょうに・・・』

「ふええええっえええ」ハバナはやだなあってつくづく思った。

キャンサーハンズM5宙域の動乱の幕開け

レイドはアマツミカの格納されているハンガーへ歩いていた。

コンペの詳細をMIIESを通してムーンカウンター司令部から指示が出る。

各社の機体の初期待機位置の場所など、細かな指示が出ていた。

MIIESを通して位置関係がよくわかる。

しかし、レイドは違和感があった。

どうも、ライブシーク社と詠月教導興社の位置が他社の隊列から離れすぎている。

しかもライブシークのコンペ機体とその随伴のベルゲを遮るように詠月のコンペ機とベルゲが並んで待機している。

そのことを司令部に聞いた。

「ああ、それならライブシーク社から今回の機体のスペックの都合上他社よりも離して欲しいとの要望があったそうだ。」MIIESを通して面倒くさそうな声が聞こえてきた。

「でも、詠月さんの場所も変ですよ？」レイドは食い下がった。

「んなこと、言われても知らんよ。私も今回の配置はこれでいくと本部から指示があったただけだからな。」

「なんだ？、他社にいちゃもんつけてるのか？。コンペは公正に評価するから安心しろ。」

「いや、そうでは……。はい、わかりました。」レイドは諦めた。

コンペは公正に評価するか……。本当なのだろうか、今までコンペに参加してきたが疑念を抱くことが多々あった。

「レイド！ 今回のコンペ、ライブシークと詠月の位置が変だと思わないか。」

MIIESを通してカーライルからの割り込みがあった。

「ええ、僕も変だと思って聞いていたんです。レイドは答えた。」

「納得できる答えは来なかっただろう。」カーライルは不満そうだった。

「はい、どうしましょう。」

「こちらはいつもどおりやるしかない。しかし今回のようにあからさまに変なのは少しきになるな。いつも以上に周囲の状況に気をつけてやるしかないな。」

「そうですね。」レイドは胸騒ぎが収まらないことが気にかかった。

そうこうしてるうちにクローゼットに着いた。

巨大な女性がレイドの目の前にいた。

-レイドさん、待ってましたよ！！

「フェイス！ 少し落ち着け、今から大事なコンペなんだ。」レイドは少し怒ってみせた。

-やーん、怒られちゃったー。でもでも、レイドさんのほうがいつもより心拍早いですよ！

「だぁー、うるさい！、武者震いだよ。」

-武者震い？体は震えてないようですが？

「……」

「ほら、お前らはやくしろー」カーライルは二人に声をかけた。

-さあ行きましょう、レイドさん。

アマツミカは搭乗させるため腕を伸ばしてきた。

「まったく、調子狂うよ・・・。」レイドは伸ばされた腕に掴まり搭乗した。

-でもでも、レイドさん心拍数はいつも通りになってますよ。

「・・・」レイドはA.I.にいいように扱われている気がして黙るしかなかった。

※注釈

-詠月教導興（えいげつきょうどうこうしゃ）-

神久夜が主導する軍事企業。その性質上あまり目立つようなことはしない。他社からも地味な会社という印象を持たれている。

-コンペ（competition）-

軍事用品採用のための試験のこと。巨大ロボット兵器から兵隊用の下着まで多岐に渡る。

当然、軍も兵器開発も行うが開発費用と軍事効果のコストパフォーマンスが折り合わないこともあり段々と民間へと移行している。

民間採用のリスクもあるが、基本となるベース規格を民間へ提示することでそれを低減させようとしている。LOE規格やEAA規格がそれにあたる。

-ベルゲ-

機体回収専門の機体のこと。軍事機密の塊である兵器を回収するための兵器。戦車を回収するためのベルゲ戦車などが現実にある。有名どころだとベルゲ・ティーガーなど。

キャンサーハンズ宙域は、帯状に2つに別れたデブリ帯で構成される。
上下に別れたデブリ帯は弧状になっており、カニのハサミのように見えるためこのような名前が付けられた。

デブリを構成するものは、ユニオンの残骸などが多い。
中には、未起動の爆雷などもある。
非常に危険な宙域のため通常は航行禁止の措置が取られている。

「ハバナ、バックアップお願いね」

「了解です、レックス。私がライブシークのベルゲを処理します。」

「それで、私が爆雷を設置した宙域へ誘導するわ。」

『二人共お願いね。』

「了解です。神久夜」

二人の乗る機体"彩月"はリアクターを臨界まで高めた。

ピピピピッ コンペ開始のシグナルが出た。

各社機体は一斉に発進した。

コンペの目標は標的型デブリの破壊とデブリ帯通過性の評価である。

しかし、詠月教導興社の2機体は違った。

レックスはコンシールレーダーをライブシークのコンペ機に照射した。

「ファーストステップ完了」

「電子戦開始。攻性防壁破壊完了、ライブシークベルゲを孤立完了。」ハバナは黙々と報告した

。

「リアクターバイパス開放シグナル入力。0.1secでゲートを連続で叩きます。」

『擬似ネットワークに接続するのも忘れずにね。』神久夜が一言挟んだ。

「はい、ベルゲの方は完全に擬似ネットワークの方に繋がれてますね。」ハバナは答えた。

ライブシークベルゲは推進力を失い、失速しだした。

「リアクターバイパス開放完了。再起動は不能です。ベルゲの処理完了。」

『よくやった！ ハバナ』神久夜は自室で手を叩いた。

「こちらレックス。軌道誘導はもういいかな」

「レックス、もう少し先です。ここでは明らかに他社から見られてしまいます。」

「了解、ハバナ一緒にライブシークを追い込んでラインを上げよう。」

「わかりました、レックス。」ハバナは答えた。

ライブシークの機体を彩月が追う。当然、ライブシークはバーニアを吹かしてスピードを上げた

。

多数のデブリが先頭のライブシーク機を襲う。

デブリが機体表面に当たるたびに、デブリが細かな破片となって散っていく。

「ハバナ、あれ何してるのかな。」

「たぶん、最表面の装甲を超振動させて破砕しているのでしょう。」

「EAA規格に対する回答があれなんだ……。なんかズレてるよね。」

「まあ、レッキス。試みは多数あって良いと思いますよ。」ハバナは答えた。

「見てみて！ハバナ、アレ。あれよあれ、私達がして欲しかったのは。」

ハバナはレッキスの指し示した先を見た。

そこには、一機の機体がまっすぐ進んでおり、機体の数メートル先でぶつかるはずのデブリが塵のように消えていた。

その機体の照合コードには、

▶ OAL-02 "Amatsumika" ABAS

と示されていた。

レイドは、前方を進む3つの機体を追いかけていた。
後ろから自社のカーライルが乗るベルゲが付いてきていた。

「レイド！無理して前の機体を追わなくていい。」カーライルはレイドに言った。
「でも、あいつらは怪しいんです。付いて行って不正をしていないかを確認する必要があります。」レイドは声大きく答えた。
「目的を見失うなよ。コンペ課題のクリアの方が大事だ。」カーライルはもう一度説得した。
「それなら、追いかけてながらも出来ます。」
今回、カーライルが随伴として抜擢されたのは、レイドの暴走を止めるためでもあった。
とはいえ、物理的に止める方法はなく、ひたすら説得するしかなかった。

先頭を進んでいるのは、ライブシーク社のコンペ機 "A03 Mk II"。
その後ろを追いかける2機体が詠月教導興社の"彩月"。
そしてその更に後ろをABAS社 "OAL-02"を含む他社機体がいくつか付いてきていた。

コンペの公正性についてはいろいろと議論があるところではあるが、ことABAS社に限ってはコンペで負ける要因は2つある。
1つめは技術力不足、もう1つはレイドの暴走である。
レイドは確かに機体の操縦技術やひらめき力など優秀ではあるが、感情的になり目的を見失いやすいという欠点があった。

「レイド、あいつら(前方の3機体)の真後ろを追いかけるな。点数を取れないぞ。」カーライルは焦っていた。
「わかってます。」レイドは答えたが、動きを変ようとはしなかった。
-レイドさん、全然点数取れてないですよ。
「わかってるよ。言われなくても！」
-でもでも～。
「・・・フェイス、それならお前がターゲットを破壊しろ。」
-えええ、でもそれは私の行動規則に反しますう。
「ターゲットは無人の漂流物だ。何も規則に反しないだろ？」
-確かにい～。じゃあ、撃ちますよ。

FCS(Fire control systems)権限がフェイスに渡された。
アマツミカの服でもある結晶装甲が面発光し始めた。
あたりが明るくなる。

「おい、レイド何してる！」カーライルはびっくりした。

「ターゲット破壊をフェイスにやらしてるだけです。」レイドはさらりと答えた。

「おい、どういうことだ。」カーライルはさらにびっくりした。

-じゃあ いっきまーす！！。

アマツミカの服は単色のワンピースから水玉模様のワンピースに変化していた。

その瞬間、水玉の部分から極太のレーザーが射撃された。

-レイドさん、移動しましょう！！ ターゲットをあらかじめ破壊します！！

「分かった、ジェネレーターの分配は任したぞ。」

-りょうかーい！！

アマツミカは、前を走る機体からベーンを吹かして離れた。

その間、レーザーは出っぱなしだった。

デブリのゴミの山を丁寧になぞるようにレーザーが走査されてコンペ用のターゲットを次々に破壊していった。

レイドの外装ヘルメットには、点数がどんどん加算されていく。

「いいぞ！ フェイスどんどんやれ！！」

-あたし、頑張っちゃうかもお～！！ それえー！！

アマツミカの前方斜め下をライブシーク社と詠月教導興社の機体が変わらず進んでいた。

「この場所なら何をしているか、よくわかる。」思わずレイドは思考を口にした。

ところかまわず、レーザーを走査させ辺り一帯を破壊していった。

A.I.にやらせるとあんな戦闘になるのか・・・ カーライルは呆れていた。

-ああ！ しまったかもお。

ビィィィィィィィ！！ 警告音が鳴った。

「どうしたフェイス！」

-ユニオンの残骸の中に爆雷があったみたいです。

レーザーがあたり、ユニオンの爆雷が起動して大爆発を起こした。

爆風で一気に周囲のデブリが高速で撒き散らされた。

と同時に、レイドのしているコンソールにノイズが走った。

「何が起きた、フェイス」

-・・・さっきの爆雷、電磁チャフが入っていたみたいです。それに伴いセンサー系が麻痺しています。いま見てもらっているのは私による画像補正と予想が入っています。

「いつ回復する？」

-80sec後です。しばしお待ちを。

「・・・レーザー射撃は一旦やめていい、その代わりにセンサー系のイニシャライズに注力しろ。

そして、ACP膜の厚みを上げろ。」

-了解です！

レイドは少し後悔した。フェイス(A.I.)に射撃をやらせた結果、爆雷を起動させてしまった。そして、何よりも注意を払っていた3機体の動向を僅かな間とはいえ、つかめなくなってしまったのだ。

レイドのコンソールには回復までのカウントダウンが表示されていた。

ビイイイイイイイイイ！！

また警告音が鳴った。

「どうしたフェイス！！」

-また別の爆雷が起動したみたいです。

「今はレーザー射撃やめてるだろ。」

-はい、私達ではなく、えーと、電磁波濃度から前方を進む3機体のあたりみたいです。

襲いかかる思索

「もう邪魔ね」レックスはイライラを隠さずに言った。

「確かに、執拗に追いかけますね。私達を」ハバナも答える。

先頭をライブシーク社のコンペ機が走っている。

その後ろを詠月教導興社のコンペ彩月とベルゲ彩月を追いかける。

そのさらに後ろをABAS社のコンペ機が付いて来ていた。

「私達の後ろを付いて来ても、ターゲットの破壊は出来ないのに。」

「何を考えているんでしょうね？」ハバナはレックスが言おうとした続きを言った。

「なによりもこれじゃ作戦実行できない。」レックスがボソリという。

「・・・」ハバナは考えていた。

詠月教導興社の彩月は一見すると和服を着ているような外見である。

帯状の積層装甲が織り込むように重なり合い、着物を着ているように見える。

織り込まれた積層装甲は緩めて開放することが出来、中から隠し武器やその他の拡張兵器を展開することができる。

緩めて解いた積層装甲は触手のように動かすことが出来、レーダー網の展開や有線でのジャックなどに使われる。

「ハック出来ないの？」レックスは尋ねた。

「ええ、無線でそれとなく侵入しようとしているんですが、ほぼスタンドアロン状態みたいで。」

「それも無理かあー」レックスは息を吐いた。

「・・・動きました！、我々の斜め後ろに陣取りました。」ハバナは報告した。

「って、余計私達を俯瞰できる位置じゃない・・・っと射撃を始めたわね。」

「すごいですね、レックス。あの太さのレーザーであたりかまわず撃ちまくってますよ。」ハバナは啞然とした。

「・・・っていいこと思いついた、設置した爆雷の方をレーザーの走査位置にずらすわよ。わかるわね。」レックスはニッコリとした。

「ええ、了解しました。」ハバナも笑った。

「あのレーザー射撃は正確すぎる、おそらくA.I.による補助が入っている。それ故に次走査位置を簡単に予測できる。」ハバナは淡々と口に出した。

「MIIESで相対誘導するのね？ハバナ」

「はい、若干思考負荷は高いですが、やってみます。」

「演算補助は私がするわ。」レックスは息巻いた。

「ありがとうございます。それではいきますよ・・・」

「3、「2、1、ハイ！！」」二人は掛け声を合わせて、思考演算を合わせた。

設置した爆雷が停止位置を変え、レーザーの走査線上へと移動する。

誘導の際は気付かれないようにアマツミカから見えないように細心の注意を払った。

「「Hit！！」」

パギィイイイイイイイイン！！

爆雷が起動、まばゆい光と爆風と電磁チャフを一帯に撒き散らした。

「成功です！レックス」ハバナは叫んだ。

「よし、じゃあ、コード入力！！、 私達の爆雷ちゃん行っちゃってえー」レックスも叫んだ。

コンペ彩月は身にまとった着物を展開して高強度レーダー発信をした。

電磁チャフの中を再現するようにノイズ信号を使って設置爆雷を起動させた。

周囲に設置された爆雷が目覚めた。

そして、一斉にライブシーク社のシグナルを放つコンペ機目掛けて群がるように襲いかかった。

次々に爆雷があたり、みるみるライブシーク社のコンペ機A03 Mk IIの装甲が取れていく。

さらにアーキテクトフレームが顕になる。

それでも爆雷は次々にHitしていく。

オープンチャンネルでCM4宙域に声が響いた。

「た、助け t くあああああああああ」

爆熱がA03 Mk IIの反応炉に届き大爆発を起こした。

周囲はより一層明るくなった。

思考の先に見える事象

-レイド！ センサー系回復します。

「早いな、よし。」

レイドのヘッドマウントディスプレイに前方のライブシークと詠月の機体の様子が映し出される。

「な、どういことだ・・・。」

レイドの目には大破したライブシーク社のコンペ機が映った。

慌ててアマツミカの軌道を修正して、駆け寄った。

「おい、大丈夫か？ 何があった！」レイドはオープンチャンネルで発信した。

少し間を置いて詠月教導興社の彩月が答えた。

「どうやら、デブリの中のユニオンの機雷に接触したみたいです。」

女性の声が聞こえた。

レイドは、大破したライブシーク社に話しかけた。

「おい！大丈夫か？ 生きてるか」

ライブシークのコンペ機からは反応がなかった。

「フェイス、どうだ？」

-レイドさん、残念ながら。あちらさん、反応炉の火も完全に消えています。

「パイロットは？」

-不明です。脱出したかどうかはわかりません。

「一帯を隈なくスキャンしろ。どんなノイズもひろえ。」

-了解です。

アマツミカは自身のワンピースを広げて一帯をラディカルスキャンした。

後方からベルゲに乗ったカーライルが追いついてきた。

「どうしたレイド、何があった。」

「カーライルさん、事故です。ライブシーク社の機体が機雷に接触したみたいで・・・。」

「パイロットは？」

「それが不明なんです。総スキャンかけているのですが、、」

カーライルは、レイドの声から焦りを感じた。

「機雷爆発の衝撃で別の宙域まで飛ばされたかもしれん、移動してスキャンしろ。」

「は、はい！！」レイドは、すかさずアマツミカを急発進させ移動させた。

「詠月教導興社の方々もお願いできますか？」

「「ええ、もちろんです。」」

詠月教導興社のコンペ機とベルゲ機の彩月も移動して行った。

カーライルの耳には詠月からの返事に焦りはないように感じた。
そこに違和感を感じた。

カーライルはふと大破したライプシーク社を見た。
この間ひどい目に遭った909MkIIIとは違う機体のようだ。
見れば見るほどひどい。
機体の中身が見えている。人間で言えば内蔵といったところか。
機体の至る所にえぐられたような傷跡がある。

・・・。

カーライルは胸騒ぎがした。
恐る恐る自分の思考を進めた。
月の最新鋭機の装甲を食い破るほどの単発の機雷をユニオンが持っているのか。
複数の機雷が当たったのなら、なぜ衝突する前にライプシークの機体は避けるなり除去するなり
の行動を取らなかったのか。
そもそも機雷ほどの大きいデブリならスキャンングで簡単に補足できるし、そういった進行ルー
トは普通通らないはずだ。
設置型の機雷ではなく、感応型爆雷(待ち伏せ型)に襲われたのか。
確かにそれなら装甲を破られたり、複数の傷跡があるのもわかる。
・・・待て、だったらなんでライプシークの機体だけ襲われたんだ。
確か、先行していたのライプシークと詠月の3機だった。
なのに、詠月の彩月はまるで無傷だった。

・・・！！

レイドが危ない！！

伝令

「ハバナ、どう他社の機体は？近い？」

「うーん、そうですね。遠いですね。」

「やっぱりそうかー。結局あのABASの機体を引き離すために当初の予定とは違う宙域まで来ちゃったしねー。」

「やはり、私達の動きは怪しまれてたのでしょうか？レックス。」

「えっ そりゃそうでしょ。」

レックスは、ハバナの分析にちょっと驚いた。

ハバナは想定外のことが起きたためか察しが悪くなっているのかなとレックスは思った。

「で、件のABASくんはいまどの辺？」

「えーっとですね。？、あれ？いないなあ」ハバナは索敵範囲を広げた。

「いました！ って、駄目です。はわわわわ」

「ハバナ、落ち着いて。何が起きたの？」

レックスは意識をハバナへ合わせた。

「あちゃー、確かにこれはダメね。」

レックスとハバナの目には、キャンサーハンズ宙域から出ているABAS社のコンペ機の様子がディスプレイに映っていた。

「しかも、地球側に出ていますよ。」ハバナは頭を抱えた。

「あんなところまで出て行ったってライブシークの搭乗者は見つからないわよ。」

しんじゃっているのにねえ～

「姫様、いきなり会話に割り込まないでよ・・・。」

まあまあ、レックス。それより、ライブシークの機体回収はどう？

「進んでないでないわ。」

困ったにゃ～。 神久夜は腕組みして悩んでるアピールをした。

よし、ちょっと待ってて。 今度は手のひらを拳で叩いた。

PiPiPiPiPi・・・

レックスとハバナは自分のコンソールに目をやった。

ムーンカウンターからの伝令が来ていた。

「なにになに・・・」レックスは伝令に目を通した。

発：ムーンカウンター 宛：各企業機体

ライブシーク社コンペ機、敵機雷接触により大破せり。

搭乗者の生死不明。

機雷接触位置は CM(202.3,387.3,-026.3)

各コンペ機及びベルゲ機はライブシーク社コンペ機の機体の回収及び搭乗者の搜索を開始せり。

-以上-

これでどうよ。

「姫様、他社が一斉に移動し始めました。」

「さすがね、姫様。ムーンカウンターのお墨付きを与えたわけね。」

・・・ちょっと待って、ABAS社のコンペ機さらにキャンサーハンズ宙域を外れている！！

「！！ ホントだ！何やってんだあいつ。」

「はわわ、どうしましょう・・・」 ハバナはさらに困惑した。

また、ABAS・・・。 読めないわね。

ここではホワイトアウターは間に合わない。

レックス、ハバナ、よく聞きなさい。

あのABAS(コンペ機)を連れ戻しなさい。

さあ、GoGo！！

「「了解！！」」

彩月、2機がスラスターベーンを吹かせ、アマツミカの元へ急いだ。

VTPSによる検波

-レイドさん、戻りましょうよお、ここは指定外の宙域ですよお

「何言ってるんだ、人命が掛かっているんだぞ。ルールなんか知るか」

-それはわかりますけど、これ以上はユニオンの警戒網宙域に掛かってきますよお

「うだうだ言っていないでDR (Detective Radio)効率を上げろ!!

-う～、レイドさん怖いですう～

「・・・ AIのぶりっ子は効かんぞ。」

-それにDR効率は上げすぎてノイズフィルティングが出来なくなっているくらいですよお。

「・・・うーん、 そうだ！ あれだ！ VTPS(Versatile Tether Propulsion Systems)を使え！それならもっと検波効率上がるだろ」

-あー気付いちゃったんですね・・・

「フェイス、、、パイロットの必要としている情報をはきちんとサジェッションしろよ！」

-レイドさん、紐(VTPS)を使えばコンシールが殆ど効かなくなり、ユニオンから検知されやすくなるのですよ

フェイスの口調は少し変わった。かたい。

「何度も言わすなフェイス、人命優先だ」

-んもうっ！！ だからってレイドさんの命が危なくなったらダメダメなんですう！！

「AIなら黙って命令に従え！」

-なんでもかんでもハイハイって言うことを効かないからAIなんですう！！！！！！！！

「もういい、自分でやる！」

レイド自身、頭に血が上っているのがわかっていた。

いつもそうだ、突っ走って問題を起こす、子供の頃から変わらない、、、

いや、変えられない自分がまたここにいた。

でも、後悔したくないんだ、このとき行動しなかったことで助けられなかったと。。。

レイドはMIIESに意識を集中させながら握っているコンソールの指を少しカチカチと動かした。

Goooooooooon! 機体フレームから違う音が鳴り出した。

アマツミカの肩や肋、腰などから先端にアクティブマニピュレーターの付いたケーブルが伸び出した。

「どうだ、フェイス、救難信号拾えるか？」

-はあ、仕方がない人ですねえ。ちょっと貸してください。なるべくユニオンへのコンシールができるように紐を展開しますから。。。

「さすが、フェイス！」

-褒めても、次はしないでくださいよ。。。

フェイスの声から疲れが読み取れた。

アマツミカから伸びた無数のケーブルは様々な方向に動き出した。。。

「どうだ？」

-やっぱりこのあたりにはいないんじゃないですかねえ・・・

「教導興者たちの方が、、、しかた

Biiiiiiiiiiiiii!!!!!!!!!!!!

一瞬けたたましいアラームが鳴った。

-キャッ！！！！

「どうしたフェイス！？」

-レーダー射撃です！！ 一瞬でしたけど。

「どっちの方向だ？」

-直上です。

「ユニオン側ではないのか、、、」

-いえ、哨戒機がラインを超えている可能性もあります。

「だったらさっさと

Pikopikopikopikopiko!!!

「ったく、今度は何だ、、、」

-レイドさん、救難信号です！

「でかした！フェイス！ ライプシークの信号だな、間違いない」レイドは自分でも確かめた。

-・・・。

「フェイス行くぞ！」

-あっハイ、レーダー射撃で位置がバレてます。速やかにここから移動しましょう。

アマツミカは紐を収めて救難信号の場所へ急いだ。

-レイドさん、救難信号の遭った場所は私達が進んできた経路に近いですよ。なんでそのとき検波できなかったのでしょうか？

「・・・わからない。でも、

・レーダー射撃を受けた、逃げる必要がある。

・ライプシーク社の救難信号を検波した、救助に向かう。

何も変なことはないだろう。」

フェイスは、レイドの表情が希望に満ちてきていることを認識できた。

